

果見樟木浮海玲瓏 今吉野寺放光樟像也

『日本書紀』卷第十九欽明天皇十四年夏五月条

ほう こう ぶつ たん じょう

放光仏誕生

大淀町地域遺産シンポジウム 2019 資料集



ご挨拶

爽やかな秋空の下、本日ご来場いただきました皆様におかれましては、ますますご清祥の事とお喜び申し上げます。

また平素は、大淀町の歴史・文化事業にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

奈良県内でも有数の大河・吉野川に面し、里山の豊かさに育まれた本町は、縄文時代以来、人々の行き交う吉野文化の門戸として栄えてきました。その人と自然のかかわりによって生み出された歴史・文化遺産は、何事にも替えがたいふるさとの「宝」です。

本町では、町制施行100周年（2021年2月11日）にむけ、ふるさと吉野に眠る地域遺産を見直し、その価値と魅力を次代に伝える「地域遺産保存・活用事業」を進めています。また、平成28年度からはその一環として「地域遺産シンポジウム」を開催しています。

来年（2020年）に成立1300年を迎える『日本書紀』をひらくと、吉野最古の古代寺院「吉野寺（よしのでら）」が登場します。本町比曾にある世尊寺は「吉野寺」の故地であり、日本で最初に彫刻された「放光仏」を本尊として、その法灯を今に伝えています。

今回は、その「放光仏」の由来を記した『現光寺縁起絵巻』（世尊寺所蔵・大淀町指定文化財）に光をあて、映像上映や講演、パネルディスカッションなどを通じ、吉野寺にまつわる古代史の魅力と謎に迫ります。また、このシンポジウムが、皆様の足元にある宝物の発見と、かけがえのない歴史・文化遺産の保存・継承につながり、吉野地域が歩むべき未来へのビジョンを生み出すきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、本シンポジウムを開催するにあたり、ご協力いただきました関係各位、ご支援いただきました皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。

令和元年9月

主 催 者

ープログラム・目次ー

13:30～13:35 開会の挨拶

13:35～14:05 映像上映

「現光寺縁起絵巻が伝えるもの」 解説：松田 度（大淀町教育委員会）

14:05～14:10 休憩

14:10～15:10 <第1部：基調講演>

「比蘇寺・放光（現光）寺の変遷—縁起絵巻からみた歴史—」・・・・・・・・・・2

○講 師 高橋平明氏（公益財団法人元興寺文化財研究所）

15:10～15:20 休憩

15:20～15:55 <第2部：パネルディスカッション>

○コーディネーター：川村優理氏（NPO 法人うちのの館館長・作家）・・・・・・・・・・10

○パネラー：高橋平明氏

松田 度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

本山一路氏（世尊寺住職）・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

15:55～16:00 閉会の挨拶

☆資料☆

- ・解説「現光寺縁起絵巻の世界」・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
- ・日本列島の初期仏教関係記事・・・・・・・・・・・・・・・・・・64

【表表紙】上：現光寺縁起絵巻より（世尊寺所蔵） 下：木造阿弥陀如来坐像（世尊寺本尊）

【裏表紙】現光寺縁起絵巻より（世尊寺所蔵）

【46頁】世尊寺本尊・放光樟像（木造阿弥陀如来坐像）

ひそでら 比蘇寺・放光（現光）寺の変遷

—縁起絵巻からみた歴史—

公益財団法人元興寺文化財研究所

たかはし なりあき
高橋 平明

プロフィール：

1960年、長野県生まれ。（公益財団法人）元興寺文化財研究所総括研究員（現職）。専門は仏教美術・同文化。大淀町文化財保護審議会委員。平成19年（2007）より世尊寺の文化財調査等に携わる。



1、寺名の由来

比蘇寺の「比蘇」とは、現在の所在地名（比叢）であり、地名をその寺の名とすることは、よくあることです。

例えば、法隆寺は斑鳩寺（いかるがでら）、法（元）興寺は飛鳥寺、興福寺は厩坂寺（うまやさかでら）あるいは山階寺（やましなでら）など、法名と地名とが寺号として伝えられているものと考えられます。地名が先か、法名が先かは、さまざまであり諸般の事情があったものでしょう。

さて、本町に所在する比蘇寺とは、法名を「放光寺」、あるいは「現光寺」・「吉野寺（よしのでら）」ともされています。

現在の寺号は「世尊寺」ではありますが、町外では「比蘇寺」の名が良く知られているものではないでしょうか。その「比蘇」とは、「蘇ることを比する（くらべる、調べる）」の意味であることが、当寺の縁起を伝える絵巻（「栗天ハ一

山現光寺縁起絵巻」上下二巻 江戸時代、以下「縁起絵巻」と表記）に記されておりまして、この奇跡、すなわち、「重病人も比蘇寺本尊の香気に触れると忽ちに治癒し、また生き返る（蘇る）」という勝事に倣って地名となったものと考えられます。それからすれば、地名はお寺の名前に拠るものと考えて良いものではないでしょうか。

ところで当寺の呼称については、興味あることに気付きます。それは、「ホウコウ」（「ハウカウ」が歴史的な音の表記）です。これを漢字にすると、「放光」と「芳香」であることです。そして、縁起絵巻では、まさに「放光」と「芳香」とが重要な意味をもっていることがわかります。このことに注意して、「縁起絵巻」の描述を追いながら、記される当寺の歴史をみることにします。

2、「縁起絵巻」の展開

絵巻は上・下二巻、全 12 段の卷子装となります。金襴裂（きんらんぎれ）の表紙仕立て、立派な漆塗りの箱に納められています（詳しくは、本資料集の 32 頁で紹介されています）。その意味については後述します。内容の展開としては、およそ以下のとおりです。

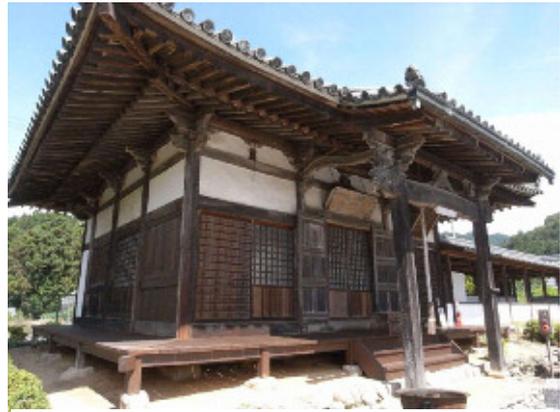
上巻については、①茅渟海（ちぬのうみ）を漂い来た霊木のこと、②霊木を仏像に彫刻するのは日本で初めてのこと、③物部と蘇我の崇仏排仏の争い、④老女による釈迦と観音両本尊の隠諾、⑤両本尊の発見と比蘇寺安置のこと、となります。

下巻については、①用明天皇 3 年(588)、淡路島に漂い着いた「沈水香（じんすいこう）」木を十一面観音に彫刻し、聖徳太子は自像を刻み、その像内に十一面観音を納めたこと、②靈験譚として「比蘇」の話と「栗天八一」の寺号の意味、③寺号は「放光樟像」の香気による蘇生の功德に拠ること、④沈水木の十一面観音像の失踪と発見譚と聖徳太子信仰のこと、⑤往古の寺塔伽藍のこと、⑥宇多天皇はじめ貴顕参詣のこと、⑦後醍醐天皇から宸翰寺号額を賜うこと、⑧弘安 2 年（1279）に金峰山から春豪聖人が仮住して、堂塔を再建して西大寺の興正菩薩観尊（1200-80）に付与して律院としたことまで、となります。

3、比蘇寺の歴史と什宝（じゅうほう）

太子信仰と西大寺

まず、上巻第一段では、当寺は「聖徳太子



▲世尊寺太子堂

の開基」と述べます。開基とは、お寺を創建した人を指します。したがって、当寺はいわゆる「太子創建四十六寺」のひとつに数えられることを後段で述べまして、飛鳥時代創建の古寺であることを語ります。境内から出土する古瓦もこれを支持するようです。

現在、境内には聖徳太子孝養像を本尊とする江戸時代に建造された聖徳太子堂（寛政 8 年・1796 年の改築。県指定文化財）があります。十一面観音像とも関係があるのです。この段では直接的には触れられていませんが、下巻第四段で、近隣の老女宅から比蘇寺から失踪した観音像を見出したところ、それが太子の形姿であったと述べているのは、聖徳太子が観音菩薩の化身であるとする「太子信仰」に拠るものと考えられます。

聖徳太子を観音菩薩の化身とする信仰は古く、奈良時代初めには法隆寺東院伽藍、すなわち「夢殿」の本尊である救世観音像が「太子等身」とされていたことが知られています。ちなみに東院伽藍とは聖徳太子、すなわち用明天皇の皇子であった上宮厩戸豊聡耳尊の斑鳩宮跡であります。「縁起絵巻」では、老女が

西大寺興正菩薩思円上人叡尊（1201-90）の弟子であった本空房なる僧侶（律僧）に帰依していたことを明かしていますが、廃れていた「戒律」は興正菩薩叡尊・覚浄・有厳・円盛らによって再興運動がなされました。このうち、叡尊が拠った西大寺流と呼ばれる律宗は全国に展開し、日本仏教の礎を築いた聖徳太子を深く信仰していました。下巻の最後段では、比蘇寺は金峰山の春豪聖人（以下、「縁起絵巻」の表記のままとする）により堂塔伽藍の再興なって叡尊に付与したこと（つまり鎌倉時代・13世紀）までを記していますが、明徳年間（1390-94）の『西大寺末寺帳』にもその名が記されており、当寺は室町時代を通じて西大寺の末寺であった記録があります。叡尊ら西大寺律僧たちは、河内・大和の太子関連寺院の再興を図っており、比蘇寺もその縁起から再興された一寺であったものとみられます。なお、春豪聖人とは、その「聖」の字からやや想像をたくましくすれば、「勸進聖」であったのではないのでしょうか。

中世から近世においては、寺院伽藍の再興は、全国を遊行する勸進聖（半僧半俗の山伏や六十六部回国聖など）の活躍に依ることが良く知られています。春豪聖人が金峰山から来たって当寺に仮住したとされることからすると修験・山伏であったのかもしれませんが。当寺には役行者像が伝わっています。春豪聖人の墓とされる中世の五輪塔も現存していますので、再興に尽力された方として伝えられたのでしょう。

上巻第一段・第二段

次に上巻第一段で注目されることは、「日域」すなわち、日本において「仏像彫刻最初」の寺であり、「放光樟像の釈迦如来・観世音菩薩」と「沈水（香木）の観世音菩薩」を本尊として安置した伽藍だとしています。つまり、前述の「放光」と「芳香」に関係する縁起があることをほのめかしています。

欽明天皇 14 年（553）に茅渟海、今の大阪湾泉南の辺りの海中に「梵音ありて音楽のごとく、あるいは雷のなるに似たり」、「夜は異光、うみのうへにかかやき日（陽）のとし」という「あるもの」が漂っていることが天皇に報告されました。「梵音」とは、「清らかな音」のことです。つまり、音楽を奏でながら、光を発する「あるもの」が、沖に漂っていたわけです。しかし、浦人たちには、それが何であるのかわかりません。

第二段では、それが「樟木」であることがわかり、「太（多）部屋栖野古」がこれを引き上げて都に運びました。

上巻第三段

第三段では、この「靈妙（音楽を奏で、放光すること）なる木」で、天皇が何を造るべきかとして、「五十（石上）太神」と「三輪太神」に占うと、仏像につくれば「国中の疫癘（病気）が止む」との託宣があったのです。ここでも古来から名だたる二柱の神社が記されていますが、「三輪太神」すなわち「大神神社」（現在の表記）が記されていることは注目されます。

早くは奈良時代中ごろから神仏習合（本地垂迹）思想が広まると、神々にはそれぞれ「本地仏」が配され、「本地堂」あるいは「神宮寺」が神社境内に造営されて社僧が神前で読経しました。前述の叡尊らは日本古来の神も大切に信仰しました。伊勢神宮にも神宮寺を創建しています。大神神社は、「三輪山」を御神体とする日本最古の神社のひとつと考えられています。そして、大神神社に置かれた神宮寺が「大御輪寺（だいごりんじ）」であり、その本尊が桜井の聖林寺に伝えられる十一面観音菩薩像なのです。木芯乾漆の技法で造られていることから天平時代後期のものとされて有名な一体です。「大御輪寺」は、明治初年の廃仏毀釈によって現在の大直禰子（おおたたねこ）神社（若宮）に改められましたが、もともとは西大寺の末寺でもありました。

江戸時代の再興

これから、江戸時代 17 世紀後半の比蘇寺再興の話となります。比蘇寺の再興には大御輪寺の律僧「高心」が取り組んでいたことが世尊寺の十一面観音像（奈良県指定文化財）内から発見された古文書の記録から推測されています。「寛文二年（1662）壬寅五月十五日造立之時、納之和州大御輪寺比丘高覺」とあります。西大寺に伝わる聖經には元禄 13 年（1700）9 月 18 日に「三輪山若宮別当神宮大御輪寺東漸院」において書写した銘文が知られているものがあり、「金剛仏子高心法臘十四 生三十四」とあります。前記聖教の奥書を調べると、元禄当時にも「高」字を法

名に持つ西大寺僧が幾人かみられますが、これは「高喜」という西大寺長老の弟子僧であったことが推測されます。江戸時代になりますと、幕府は宗教勢力を統制するため寺社数を制限する方針を図ります。合わせて勸進活動も寺社奉行の許可制として、勸進活動を制限します。そのなかで寺社の再興をするためには、「貴顕」すなわち、高位の公家や徳川將軍家や諸大名などに自らの由緒と縁起・創建の古さ・靈験とを説かねばなりません。そして、「勸進帳」あるいは「奉加帳」の表書を得ることで、勸進活動が可能となりました。そして、実際的に必要なものとされたのが、「縁起絵巻」であったわけです。場合によっては彼らの前で拵げ読むこともあるわけですから、身分の高い人たちにも礼を欠くことなく、また同時に自らの威厳を誇示するためにも（多少、背伸びしたとしても）格調の高い「本格的」、つまり、装丁が豪華であり、詞書の墨書は「能書」であり、描画には巧みで「金」を多用し、かつ発色の良い顔料を用いている作品が必要でした。こうした事情で、当寺の「縁起絵巻」の金欄裂による外装や立派な漆箱が誂えられたわけであります。ところが現在、比蘇寺は世尊寺の寺号となり、西大寺の末寺ではなく、曹洞宗に属するお寺となっております。これは、大道雲門和尚による転派と再興の結果でありました。つまり、大御輪寺による比蘇寺再興は中座してしまっただけであります。その理由は良くわかりませんが、師匠であった西大寺長老の高喜和上の宗派からの破門という思いがけない事件が影響して

いたのでないかと推考しています。

そのころの比蘇寺の様子は、「縁起絵巻」に説かれる諸尊のなかで、唯一、十一面観音像が残されているだけのようだと推測されます。しかも、その頭部は大破していたものと思われます。近年の解体調査の結果、江戸時代に修理されたものであることが判明しています。さらに、本尊の釈迦（阿弥陀）如来坐像からも銘文が判明して江戸時代に新造されたことがわかりました。これらのことによれば、西大寺の末寺から寛延4年（1751）の雲門和尚による再興までの間は、村持の浄土宗寺院として存続していたようであります。

未調査ではありますが、鎌倉時代創建とされる太子堂本尊の聖徳太子孝養像（角髪を結った貴族の少年が柄香炉を執る姿）も同じ頃に新たに造られた可能性があります。つまり、



▲世尊寺太子堂・聖徳太子孝養像

現在の寺容は、およそ雲門和尚入寺以降に整えられて現在に至るものとみられます。

仏教公伝

三番目に記されるのは、「仏教公伝」との関係です。日本に百済国から仏教が伝えられたのは、欽明天皇7年（538）とも同天皇13年（552）とされています。「縁起絵巻」では、13年説としていますが、その時に請来されたのは金銅仏でありました。また、日本で最初に制作された仏像としては、飛鳥寺の大仏が知られます。飛鳥寺は日本最初の本格的寺院とされ、推古天皇14年（606）に止利仏師が像高一丈六尺の釈迦如来坐像を制作して現存しています。飛鳥・白鳳時代には、素材的には金銅仏が最上のものとされていました。木彫像が本格化するのには、奈良時代後期に鑑真和上とともに唐の工人が来日して、一木造の技法で仏像が彫刻されてからといわれています。これからすると、漂着木から仏像を彫刻したことは、「縁起絵巻」のとおり、欽明天皇14年（553）、比蘇寺本尊として釈迦如来像と観音像とを池辺直氷田に命じて造らせたことが最初とされるわけです。両尊は、蘇我氏と物部氏との崇仏排仏の争いの中にも、取り出されてされて難を逃れたとされています。この稲の中に仏像を隠す話は、四天王寺の縁起譚に初発しているようです。

ここまでは、①海に漂い来た木、②放光する木、③音を発する木、が「霊木」として考えられたことがわかり、さらにそれを仏像に彫刻すれば、国中に流行する病気を治すこと

ができる、「奇瑞」あるとされたことが「縁起絵巻」には記されています。さらに、霊木の条件として、もうひとつ「芳香」があります。それは「樟」の樹香であります。少し前まで衣類の虫除けとして「樟脳」がありました。これは、「樟」の樹液を昇華させたもので、独特の強い香りがあります。比蘇寺本尊が霊木で造られたものであることを述べており、後段の「比蘇」の意味の伏線とされているわけです。実際に「樟」を用いて制作された仏像はかなりあります。さらに漂着した「樟」を用木として制作されたことを伝える縁起をもつ像としては、大和・長谷寺本尊の十一面観音像があります。この「樟」は、近江国三尾谷から流出して琵琶湖に入り淀川を下り河内海に漂い、その後、大和の初瀬まで曳かれて仏像に刻まれたとされています。

古来から日本人には大木に対する信仰がありました、すなわち、霊的なものを宿す存在として信仰の対象にされてきたのです。前述の三つの要素に加えて「香」を兼ね備えた霊木を仏像に現したことが比蘇寺本尊としては特徴的な事情であったことがうかがえます。釈迦如来と観音菩薩（聖観音か変化観音かは不明）とを池辺直氷田が刻んだことになっています。仏像が針葉樹の「桧」ではなく、広葉樹の「樟」で造られたことは大いに興味深いことです。

下巻第一・二段

加えて、「縁起絵巻」は下巻第一段においては、用明天皇3年（588）に淡路島に漂着し

た木を浦人が薪として燃やしたところ、香薫が村中に満ちたので、不思議に思った浦人が聖徳太子に献じたところ、太子は「沈水香」と見抜き、止利（鳥）仏師に命じて十一面観音像を刻ませたといっています。その木の大きさは「一囲、長さ八尺」とされているのですが、第二段の後半では、止利（鳥）仏師が彫刻する時に、太子も自像（自らの肖像）を彫刻して、その「腹中」、すなわち、「像内」とおもわれますが、そのなかに「沈水香」木で造った観音像を納めたとしています。そして、「放光樟像の両尊」と並置したとしています。

これからすると、比蘇寺には、「放光樟像の両尊」と聖徳太子の自刻像が安置されていたことがうかがえます。第五段では「古徳の伝云う、太子像中の十一面観音像は九面にして本容を合して十面也、太子自己の一相をくはへて十一面とし当寺に安置し給へり」と記されますから、比蘇寺にはさらに十一面観音像があったこととなります。

下巻第三・四段

ついで「縁起絵巻」は、「栗天八一」の山号の意味するところを記して、前述のとおり「比蘇寺」の寺号の功德靈験を記してその意味を述べています。しかも、興味深いことに、「余木も今猶これあり」と記しています。「余木」よる造像伝説としては、やはり長谷寺観音像が有名です。

同第四段においては、「現光寺」の寺号の由来を「神樟及沈水香木ともに光を海中に現じ給へば靈仏の威光を称美し奉り」て、号した

ものとしています。これは霊木の条件の②に当たるものです。注意されるのは、「神樟及沈水香木」と記されることです。やはり、比蘇寺の本尊として沈水香木の観音（前記のとおり、十一面観音像をさすものとおもわれる）が加えられていることが知られます。

そして、この観音像は「いつくともなくうせさせ給ひて、もとむる所なし」と、失踪してしまいました。実は比叡（比蘇、表記が異なることは、「比叡」が古い地名なのかもしれません）の里の老婆が自宅に秘蔵安置していることを、帰依していた西大寺の本空房に明かし、「我命終の後は必ず比蘇寺に送り給へと」依頼したというわけです。

そして、本空房がその観音像を拝すると「聖徳太子の形容」であったといいます。太子と観音が入れ替わっていた。そして「胎中」（像内）には、沈水香の観音像「御長一尺一寸」の像が込められていたとされます。本空房が比蘇寺に移して本尊としたところ、正和元年（1312）に法隆寺良真の門人僧がこの観音像を拝してから後は秘仏とされて、「拝する人なし」とされています。

このあたりの記述からは、「一匁、長さ八尺」の「沈水香」木から刻まれた十一面観音像の大きさは記されませんが、太子像の像中に込められていた沈水香木の観音像の大きさは「一尺一寸」というので、用木の大きさからすると小像であったことが推測されます。そうすると現在本堂脇間に安置される観音像ではないことになりそうです。もちろん、この観音像は香木像ではありませんが、奈良時代

の古様を示していることははやくから指摘されてきました。比蘇寺本尊像をめぐる謎のひとつとして「縁起絵巻」の作者はどのように考えていたものか、興味深いところではないでしょうか。

さて、霊木の「沈水香」ですが、おそらくは現在の「沈香」と思われます。いわゆる、香木は東南アジアに産出されるものであり、古代には中国からの輸入品でありました。それが淡路島に漂着したのですから、奇瑞とされたわけです。香木が放つ優香に薬効があると信じられていたことは、光明皇后が東大寺大仏に対して多くの薬類を献納したあったことからもうかがえます（目録として『種々薬帳』がある）。正倉院に伝わる香木としては、「蘭者待らんじゃたい」（「黄熟香」と記される。伽羅）が有名です。



▲世尊寺・木造十一面観音立像

下巻第五・六段

第五段では往古の七堂伽藍の堂舎を書き上げています。ここで注意されるのは、二基の五重塔が挙げられていることです。一基は敏達天皇に推古天皇が建立したもの、もう一基は用明天皇のために聖徳太子が建立したことになります。現在、中門の前には東西に基壇と礎石が残されていますので、薬師寺式の伽藍配置が推定されています。

弘安の再建ののち、室町時代の公家で内大臣であって歌人としても有名な三条西実隆（1455-1537）の日記によれば、明應5年（1496）には「塔二基相對、中央有樓門、件額云栗天八一」と記しています。再建された東塔は三重塔で、文禄3年（1594）に豊臣秀吉が吉野山に花見に来た時、比蘇寺に立ち寄り、その美しさから伏見城の観月楼に移築したことが知られています。

そして、徳川家康によって慶長6年（1601）に園城寺（三井寺）に移されて現存しています。再建年代は室町時代のものとして国指定重要文化財に指定されています。

「興福寺末寺帳」に見える寛永9年（1621）の世尊寺伽藍の書上げによれば、七間五間の講堂（本堂をさすものとおもわれる）と塔一基が知られるので、この頃にはまだ西塔は存在していたことがわかります。なお、「護摩堂」も記されるので太子堂であったものとみられますが、既に本尊は亡失していた可能性が高いのではないのでしょうか。

第六段は、参詣の知られる貴顕を列記しています。清和天皇（850-881）・宇多法皇

（867-887）・貞数親王（875-916 清和天皇第八皇子）・右大将菅原朝臣（菅原道真 845-903）・素性法師（816-910 三十六歌仙）、そして醍醐天皇（1288-1339）からは寺号宸翰を賜り勅願寺（国家鎮護・皇室繁栄などを祈願する寺）としたとしています。宸翰の額とは、前述の三条西実隆の日記にみえた「件額云栗天八一」のことを指しています。当時から有名なものであったのでしょうか。

4 まとめ

第七段は最終段です。弘安2年（1294）に金峰山から春豪聖人が「しばらく住して」「悲嘆のあまり縁をつのり」堂塔を再建して、西大寺の興正菩薩叡尊に付与したとしています。すなわち、西大寺の末寺となったということで縁起を結んでいます。このことから推察すると比蘇寺が未だ西大寺末寺であることがうかがえることになり、「縁起絵巻」の制作動機が再興勸進の支具とすること、さらに制作年代もおおよそ江戸時代前期中ごろが推測されるものとおもわれます。絵師の名は記されませんが、画風からは狩野派の流れを汲む者が想像されます。

最後に、比蘇（現光）寺が漂着霊木を本尊として白鳳時代に創建された古寺であり、近世には世尊寺として再興された由緒あるお寺であること、ならんで「現光寺縁起絵巻」が創建と寺号の縁起を語り、伽藍什宝の変遷を伝える大淀町指定文化財として、地元で護持されてきた大変貴重なものであることを御理解いただければ幸いです。

「聖徳太子二十四歳の御時」に発見された流木と 「比叡寺」の仏像をめぐる物語について

～『日本書紀』『日本霊異記』『聖徳太子伝』の記述を追う～



かわむら ゆり
川村 優理

プロフィール：

1958年、奈良県五條市生まれ。亡父川村たかしは児童文学作家。大阪外国語大学タイ語学科卒業。タイの昔話を日本語に翻訳。主たる研究テーマは異類婚姻譚。玉川大学で学芸員資格を取得。現在登録有形文化財「藤岡家住宅」を管理するNPO法人うちの館（やかた）で館長を務める。大淀町文化財保護審議会委員。五條市史編纂委員。エッセイスト、童話作家などとしての活動も多い。趣味は俳句。

はじめに

登録有形文化財「藤岡家住宅」は、五條市の金剛山麓にある近内町に残されている庄屋屋敷です。薬商、薬種商、両替商も営んでいました。戦前の官僚でホトトギス派の俳人であった藤岡長和（俳号・玉骨）の生家でもあります。平成18年3月2日、10棟が国の登録有形文化財として登録され、平成20年11月11日より、資料館として開館しました。

現存する建築物は、江戸時代後期の寛政9年（1797年）～明治45年（1912年）に建築されていますが、『北宇智村史』には、藤岡家は、大坂夏の陣（慶長20年/1615年）の後、金剛山を越えて五條の土地に入った豊臣方の武士の末裔であると記されていますが、人名、家名などについての詳細は不明です。

現在の当主は、茨城県在住のため、家屋と周辺の維持管理、施設の運営などは、NPO法人うちの館が任されていますが、資料の種類は多岐に亘っており、その点数も膨大なため、調査は現在も続けられています。

その中で、文書資料は、天保3年（1832年）に建築された母屋の厨子2階部分と、寛政9年（1797年）建築の内蔵から発見されていますが、江戸時代中期～後期に刊行された書籍類は、当時の価値観や、道徳観を知る上でも非常に面白く、そのような書物を慈しんで保存してきた商家に生きた人々の「文化力」も含め、現代を生きる私たちが振り返るべき貴重な資料であると言えます。

寛文6年（1666年）刊行の『聖徳太子伝』は、全10巻10冊がほぼ完全な形で、厨子2階から発見されました。江戸時代に仏教の教化を目的として製作された「勸化



▲聖徳太子伝（藤岡家所蔵）

本」と分類されるようですが、単に仏教を広めるといふより聖徳太子の超人的な能力を語る伝説的な読み物で、ほかに卷子仕様の「十七条の憲法」など、聖徳太子関連の資料数点を大切に所蔵する、いかにも藤岡家好みの書籍です。

この『聖徳太子伝』（巻 6）「聖徳太子二十四歳の御時」に、大和国の比叡寺が登場します。同書によると、聖徳太子の命によって、不思議な流木で造った仏像を安置した比叡寺は、四天王寺、法隆寺と並ぶ大寺院で、7つの大院が建てられていました。その中の安居院には、西方より流れ着いた木で仏像を造ったことを意味する「西木天八一」という額が掲げられていました。

江戸時代の『聖徳太子伝』のこのような記述の元になっているのは、奈良時代の養老4年（720年）に完成した『日本書紀』巻19「欽明天皇14年」の記述であり、平安初期に書かれた『日本霊異記』（上巻）の「大

部屋栖野古の造仏」の話です。

この3つの書を比較すると、各時代の「聖徳太子観」、および「仏教観」の差異が鮮明になると共に、大淀町比叡寺の風景が見えてきます。

では、光り輝く仏像と比叡寺の物語を、まず時代順に並べてみることにしましょう。

1、『日本書紀』巻第19

欽明天皇14年（553年）

なつさつき つちのえたつ ついたち かわちのくにもう
夏五月の戊辰の朔に、河内国言さく、
いずみのおり ちぬ うみ
「泉郡の茅渟の海（大阪湾南部の和泉灘）
の中に、梵の音（^{のり} ^{おと} 笛や箏などで演奏する仏教
の音楽のこと）す。震響雷の声の若し。光彩
ひびきいかつち おと こと うるわ
しく晃り^て ^{かがや} 曜くこと日の色の如し。」

みこころ あや いけべのあたひ ここ
天皇、心に異しびたまひて、溝辺直く此に
ただ あたい な
但に直とのみ日ひて、名字を書かざることは、
けだ
蓋し是伝へ写して誤り失へるかを遣して、
もと
海に入りて求訪めしむ。是の時に、溝辺直、海
に入りて、果して楠木の、海に浮かびて玲瓏
み
を見つ。遂に取りて天皇に献る。画工に
みことりのり ほとけのみかたふたはしら
命して、仏像二体を造らしめたまふ。
いま よしののてら くすのき みかた
今の吉野寺に、光を放ちます楠の像なり。

『日本書紀（三）』岩波書店（1994年）より引用し、新仮名遣いに改変。（ ）内は注釈。

（訳）欽明天皇の御代14年の夏、5月のこと。河内国から「泉郡の茅渟（ちぬ）の海（大阪湾）より、仏教の音楽の音が聞こえ、まるで雷のように大きな音です。その上、あたりは日の光のように、美しく照り輝いています」との報告がありました。天皇はこの話を不思議に思い溝辺直（いけべのあたひ）という人

を遣わして海の中を探させました。すると、溝辺直は海の中で照り輝く楠木(くすのき)を見つけましたので、これを持ち帰り、天皇に奉りました。天皇は仏師に命じて、この木で仏像2体を造らせました。これが今の吉野寺(比叢寺または現光寺ともいう。奈良県吉野郡大淀町比叢世尊寺の地)に光を放っている楠木の仏像です。

欽明天皇(509年?~571年)の在位中、最大のできごとは、仏教伝来と任那への出兵でした。朝鮮半島では、新羅が強大化しますが、その情勢下において百済は、日本の軍事的援助を求め、それと同時に、仏教を伝えました。

『日本書紀』によると、欽明天皇13年(552年)10月、百済の聖明王から仏像、経論が献上され、使者から仏教の教えを聞いた天皇は、大いに喜んだものの、仏教を受け入れるべきかどうかは、一人で決めず、群臣に尋ねることにしました。

蘇我稲目は、「西の諸国は、みな仏教を礼拝しているので、日本も礼拝すべきです」と答えました。物部尾輿(もののへのおこし)と中臣鎌子(なかとみのかまこ)は「蕃神(外国から渡来した神のこと。この場合は仏を指す)」を拝めば、日本で元から拝んでいた国つ神の怒りを受けることになるでしょう」と言って、仏教を受け入れることに反対しました。

そこで欽明天皇が蘇我稲目に、試しに礼拝させてみると、国に疫病が流行り、若くして死に至る人が多く出ました。物部尾輿と中臣鎌子は「これこそ仏教を礼拝したことが原因だ」と言い、天皇の許しを得て仏像を難波の堀江に流して捨ててしまったり、寺を焼いたりしました。

仏教伝来の年については、宣化天皇3年(538年)説と、欽明天皇13年(552年)説があって、538年説が有力ですが、仏像を海に流し、また、その海から仏像の素材となるものが拾われたと考えるこの逸話は、「盛んになっていく海外との交流」と「外来文化としての仏教の伝来」の両者を同時に伝える話として非常に面白く、そこに、海からは遠く離れた「吉野」「比叢寺」が登場することも、興味深い事象です。

注目したいのは、欽明天皇が仏教を受け入れようという姿勢であったけれども、臣下たちは、外来の宗教である仏教を「蕃神」と呼び、新しい信仰が日本に入ること、古来から日本にあった信仰の体系が崩れることを恐れている、ということです。

さて、『日本書紀』は、欽明天皇の治世からおおよそ50年後、推古天皇の時代にも不思議な流木があったことを記していました。

2、『日本書紀』巻第22

推古天皇3年(595年)

なつづき ちむ じんこう
夏四月に、沈水(香木的一种。沈香とも言う)、
あわじのしま よ そ ひといだき しまびと
淡路嶋に漂着れり。其の大きさ一圍。嶋人、
ちむ たきぎ か
沈水といふことを知らずして、薪に交てて
かまど た けぶり け
竈に焼く。其の烟気、遠く薫る。即ち異なり
として 献る。
たてまつ

『日本書紀(四)』岩波書店(1994年)より引用し、仮名遣いを新仮名遣いに改変。()内は注釈。

(訳) 推古天皇の御代3年(595年)の夏、4月。沈水(ちむ)という貴重な香木が淡路島に流れ着きました。その大きさは一抱えほどもあります。島の人たちは、香木であることがわからず、薪に混ぜてカマドにくべま

すと、遠くまで香りましたので、普通のことではないと、献上しました。

『日本書紀』のこの記述の前後には、仏教が日本に定着していく過程が書かれています。

推古天皇2年春2月、推古天皇は、聖徳太子や、高位の臣下に（仏・法・僧）の興隆を命じ、臣下たちは、競って各々の親の恩のために、仏舎を建て、これを「寺」と呼ぶようになりました。

香木が発見された推古天皇3年の5月には、高句麗（こうくり）の僧慧慈（えじ）が来日して聖徳太子の師となります。この年には、百済の僧慧聡（えそう）が来日。翌年、推古天皇4年の11月には、法興寺（元興寺）が建立され、この二人の僧が入りました。同時期に、百済や新羅との交流も盛んになっています。

『日本書紀』は、欽明天皇と推古天皇のそれぞれ時代に、同じように大陸から流れ着いた流木の話淡淡と記述しながら、半世紀の間に、日本の中に仏教の影響や大陸との結びつきの変化がどれほどあったかを物語っています。「流木の話」は、仏教の伝来と大陸との交流の歴史の「一つの象徴」ととらえることができそうです。

『日本霊異記』は、南都薬師寺の僧、景戒によって著された説話集です。延暦6年(787年)に一応まとめられ、その後、弘仁13年(822年)に加筆されて完成。『日本書紀』からおおよそ100年後の書物となります。

『日本書紀』に記された欽明天皇の時代の流木についての同じ話が『日本霊異記』にも掲げられていますが、記述内容は、かなり変化しました。

3、『日本霊異記』上巻 第5

「三宝を信敬したてまつりて現報を得し縁」

^{びだつ}敏達天皇のみ代に、和泉国の海中にして楽器の音声有りき。笛と箏と琴と篳篥（東アジアで使われていた弦楽器）等の声に如れり。或るときには雷の振ひ動けるが如し、昼は鳴り夜は輝き、東を指して流る。

おおともやすのこむらじきみまうてんのうもだあ
大^{まこと}部^{おおききき}屋^{まう}栖^{てん}野^{のうもだあ}古^{のうもだあ}の連^{のうもだあ}の公^{のうもだあ}聞^{のうもだあ}きて奏^{のうもだあ}す。天皇^{のうもだあ}嘿然^{のうもだあ}りて信^{のうもだあ}と^{のうもだあ}した^{のうもだあ}ま^{のうもだあ}は^{のうもだあ}ず。更^{のうもだあ}に^{のうもだあ}皇后^{のうもだあ}に^{のうもだあ}奏^{のうもだあ}す。聞^{のうもだあ}しめ^{のうもだあ}して^{のうもだあ}連^{のうもだあ}の^{のうもだあ}公^{のうもだあ}に^{のうもだあ}詔^{のうもだあ}り^{のうもだあ}て^{のうもだあ}日^{のうもだあ}は^{のうもだあ}く、『汝^{のうもだあ}往^{のうもだあ}き^{のうもだあ}て^{のうもだあ}看^{のうもだあ}よ』との^{のうもだあ}たま^{のうもだあ}ふ。詔^{のうもだあ}を^{のうもだあ}奉^{のうもだあ}り^{のうもだあ}て^{のうもだあ}往^{のうもだあ}きて^{のうもだあ}看^{のうもだあ}るときに、実^{のうもだあ}に^{のうもだあ}聞^{のうもだあ}き^{のうもだあ}しが^{のうもだあ}如^{のうもだあ}く^{のうもだあ}に^{のうもだあ}霹^{のうもだあ}靂^{のうもだあ}に^{のうもだあ}当^{のうもだあ}り^{のうもだあ}し^{のうもだあ}く^{のうもだあ}す^{のうもだあ}の^{のうもだあ}き^{のうもだあ}楠^{のうもだあ}有^{のうもだあ}り^{のうもだあ}き。還^{のうもだあ}り^{のうもだあ}上^{のうもだあ}り^{のうもだあ}て^{のうもだあ}奏^{のうもだあ}さ^{のうもだあ}く。『高^{のうもだあ}脚^{のうもだあ}（大^{のうもだあ}阪^{のうもだあ}府^{のうもだあ}堺^{のうもだあ}市^{のうもだあ}浜^{のうもだあ}寺^{のうもだあ}付^{のうもだあ}近^{のうもだあ}の^{のうもだあ}海^{のうもだあ}岸^{のうもだあ}）の^{のうもだあ}浜^{のうもだあ}に^{のうもだあ}泊^{のうもだあ}つ。今^{のうもだあ}屋^{のうもだあ}栖^{のうもだあ}伏^{のうもだあ}して^{のうもだあ}願^{のうもだあ}は^{のうもだあ}く^{のうもだあ}は^{のうもだあ}仏^{のうもだあ}像^{のうもだあ}を^{のうもだあ}造^{のうもだあ}る^{のうもだあ}べ^{のうもだあ}し』と^{のうもだあ}ま^{のうもだあ}う^{のうもだあ}す。

（略）連の公、詔を奉りて大きに喜び、嶋の大臣（蘇我馬子のこと）に告げて詔命を伝ふ。

大臣も亦喜び、池辺直氷田（我が国最初の仏工）を請けて仏を彫り、菩薩三体のみ像を造り、豊浦の堂に居きて、諸人仰敬す。然るに物部弓削守屋の大連の公、皇后に奏して曰さく、『凡そ仏の像は国の内に置くべからず。猶し遠く退けたまへ』とのたまう。皇后聞しめして、屋栖古の連の公に詔りて曰はく、『疾く此の仏の像を隠せ』とのたまう。連の公詔を奉り、氷田の直をして稻の中に蔵さしむ。

弓削の大連の公、火を放ちて道場を焼き、仏の像を將て難波の堀江に流す。（略）

ここに天亦嫌み、地復憎み、用明天皇のみ世に当りて弓削の大連を挫ぎつ。則ち仏の像を出して後の世に伝ふ。命もて吉野の窈寺に安

置しまつりて、光を放ちたまふ阿弥陀の像是れなり。

『日本霊異記(上)』講談社学術文庫(2019年)より引用。()内は注釈。下線部は、『日本書紀』と大きく異なる箇所。

(訳) 敏達天皇の御代に和泉国の海中から楽器の音が聞こえてきました。その音は、ある時は笛・箏・箜篌(くご)などを合奏している音のようでした。また、ある時は雷が鳴りとどろく音のようでもありました。昼は鳴り、夜は輝き、その音や光は東をさして流れて行きました。

大部屋栖野古(おおともやすのこ)はこの噂を聞いて敏達(びだつ)天皇に申しあげましたところ、天皇は黙ったままで、ご返事をなさらず、お信じにならなりませんでした。そこで今度は皇后に申しあげたところ、皇后は屋栖古に「そなたが行って調べなさい。」と命じられました。屋栖古が詔を体(たい)して行ってみると、ほんとうに噂に聞いたとおり、音や光があり、そこには落雷にうたれた楠が流れ着いていました。

屋栖古は都に帰って、「高脚の浜に楠が流れ着いていました。あの楠で仏像を造ることをお許してください」と申しあげ、皇后から望む通りにしなさいと言われました。

屋栖古はたいへん喜び、早速、嶋の大臣蘇我馬子に皇后の詔をお伝えし、池辺直氷田(いけべのあたひた)を招いて菩薩3体の像を造りました。

その像は、豊浦寺に安置し、多くの人々がお参りしたのですが、物部弓削守屋の大連が皇后に「仏像などを都の近くに置いたりしてはなりません。遠い所に捨てるべきです。」と進言し、皇后は「早くあの仏像を隠しなさい。」と言われたので、屋栖古は氷田

直に仏像を稲わらの中に隠させました。すると、弓削の大連の公は火をつけて寺を焼き、多くの仏像を探し出して、難波の堀江に流してしまいました。(略)

天の神も地の神も、これを嫌って憎み、用明天皇の御代に弓削の大連を誅伐してしまい、その後、この仏像を取り出し、勅命によって大和国吉野郡の窃寺に安置しました。光を放っておられる阿弥陀仏がこの像です。

『日本霊異記』には、「今世安置吉野郡比蘇寺而放光阿弥陀之尊像」と、比蘇寺の名前が明確にされており、時代は、敏達天皇の治世。仏教導入に賛成する蘇我馬子が大きな決定力をもっています。

彫られた仏像は3体。『書紀』のように吉野の寺に安置したと記す前に、先に飛鳥の豊浦寺に安置したとあります。権力の位置関係が、吉野から飛鳥へ移行していったことを示すものかもしれません。

このような変化を経て、江戸時代前期の『聖徳太子伝』は、流木を巡る物語は、また、新しい意味をもちます。以下に『聖徳太子伝』より該当箇所の一部分を掲げます。

4、『聖徳太子伝』巻6

太子二十四歳之御時
推古天皇三年乙卯歲きのとうのとし
春の比ころ、土佐の南海に光り物あり。音は雷電らいでんのごとくにして、海上の塩にひかれ、風にしたがひ、東西南北にうかびたゞよひ侍り。数日を経て、淡路島の南の浦にたゞよひ侍りければ、彼島人おどろき、よりてこれを見るに、ふるき浮き木にて侍り。その色、いつくし。諸

人、「きりとりて、薪にせばや」と、申ければ、ある老人、申やう、「是は、ふしぎの物なり」とて、申ければ、とて、すこし火に焼きければ、その香、天下にみちみちて、薫じける。諸人、心もあざやかに侍りければ、島の人、浮き木を内裏へささげたてまつる。時の関白、聖徳太子のげんざん（見参）にいれ奉る。

（訳）聖徳太子が24歳の時。

推古天皇3年（535年）乙卯歳。

春頃、土佐の南海に光る物がみつかりました。雷のような音がし、海上の潮と風で東西南北に漂い、数日かかって、淡路島の南の浦に流れ着きました。淡路島の人々は、驚き、近寄ってこの光る物を見ますと、それは、浮いている木でした。色が美しく、人々は、「切って薪にしましょう。」と言いましたが、一人の老人が「これは不思議な物です。」と、言い、少し、火にくべました。すると、その香りがあたりに満ち、人々は、気持ちもすっきりするようでした。そこで、島の人々は、この流木を天皇のおられる内裏に持って行き、聖徳太子がご覧になりました。

かの彼木のながさ八尺（およそ2.4m）、まはり五尺（およそ1.5m）なり。太子御感あつて、雲客卿相（殿上人たち）をあひもよほし（誘い）、内裏にまいりたまひ、この霊木のいつくしき徳を、推古天皇に奏し給ふやうは、「抑、淡路国より、一の霊木をたてまつる。赤梅檀（香木

の一種。白檀の芯材を指すこともあり、沈香を指すこともある）となづけ侍り。南天竺の南海の岸におふる霊木也。彼木のおふる所は、きはめたる難所の海辺にて侍り。盤石数百丈（1丈は300メートル）、がゞとそびへて、たやすく人倫かよはず。天竺におひても、きはめて得がたき霊木にて侍る也。この赤梅檀の花をば丁子（生薬・グローブ）となづけ、実をば鶏舌（薫香の名前。鶏の舌に似ているところから付いた名前）となづく。水に入れて久しきをば、沈水香（沈香のこと。代表的な香木）となづく。久しからざるは、浅香と申なり。しかるを、いま、我朝の粟散片国（粟粒を散らしたような国。辺地にある小さな国という意味）に、この霊木、万里の浪を分けて、たゞよひきたる事、いま、日本国に仏法を興隆しはじめて、仏菩薩の形像を造立したてまつるゆへに、上は梵天帝釈・四大天王、下は堅牢地神、乃至、八大竜王まで、をのの仏徳をかんじ、こうりうはんじゃう（繁盛）をよろ



▲聖徳太子伝（藤岡家所蔵）

こびて、数十万理の海上をくくりつかはし給へる靈木也。はやく、我君、えいらんをたれて（天子がご覧になって）、仏菩薩の像を造り給へ。むかし天竺釈尊の在世に、はじめて仏をつくり侍りしも、彼靈木をもつて、御衣木（神仏の像を作るのに用いる木材）とさだめ侍り。」

（訳）流木は、長さが2.4メートル。周囲が1.5メートルあります。聖徳太子は、この流木に感心して、殿上人たちを率いて天皇のお住まいに行き、この靈木の素晴らしい徳を推古天皇にお話になりました。

「さてこのたび、淡路の国より1本の靈木が献上されましたので、赤梅檀と名付けました。これは、南天竺の南海の岸に生える靈木です。この木の生える所は、きわめて難所の海辺です。何千メートルもの岩山がそびえ、人がたやすく行ける場所ではありませんので、天竺でも、とても手に入られない靈木です。この赤梅檀の花を丁子は名付け、実は鶏舌と名付けられています。水に長く浸かっていたものは、沈水香。それほど長く浸かっていないものは浅香といいます。

これが、我が国の小さい国に、万里の波を分けて漂って来ましたのは、いま、日本の国に、仏法が起こり、仏像を造立する時期であり、上は、梵天帝釈、四大天王から、下は堅牢地神、八大竜王までが、それぞれの仏徳を感じて、仏教の興隆と栄えることを喜んで、数十万里の海をくぐってこの国に遣わしたものでありましょう。早く、この木をご覧になり、仏像をお造り下さい。むかし天竺の釈尊の時代、はじめて仏像をお造りになったときも、靈木をもつて神仏を造る木と定められたそうです。」

（中略）

「しかれば、日本国は、ことに、観音うえん（有縁）の国にて侍るなり」とてすみやかに彼木をもつて、百済国の鞍作鳥といふ仏師をにおほせて、正観音の像をつくりあらはしてたてまつる。大和国吉野郡比曾寺の本尊とし給へり。彼の靈像、つねにひかりをはなし給ひければ、現光寺となづけ給ひけり。この寺の供養の時に、撰津国四天王寺、大和国法隆寺、同く比曾寺、この三ヶ寺の法会を、一度にとりこなはれけるに、太子は、三ヶ寺ながら、いづれの法会にも、御逢ひありける也。まことに、生身の救世観音の化来分身にてましまししかば、百千万分身したまはん事、自在の御身なり。

彼比曾寺には、七ヶの大院を建立し給へり。東院、西院、伝灯院、安居院、南方には、温室院、辰巳には行幸院、戌亥には百済院、丑寅には五重の両塔あり。一基は、推古天皇、敏達天皇の御ために、是を立給へり。一基は、太子の父用明天皇の御ために、是を立給へり。

（訳）「それならば、日本国は、ことに観音さまと縁がある国です。」と言って、すぐにその木を持ち、百済の鞍作鳥という仏師に命じて、正観音の像をつくらせ、大和の国吉野郡の比曾寺の本尊となさいました。この靈像は、いつも光を放っておられるので、現光寺と名付けました。この寺の供養の時には、撰津国四天王寺、大和国法隆寺、同じく比曾寺、この3ヶ寺の法会を一度にとりおこなわれるので、太子は、3ヶ寺ではあるけれど、どの寺の法会にも出られ、まさに生身

の救世観音が姿を変えて分身し、百千万に分身して自由自在でした。

この比叢寺には、7つの大院がありました。東院、西院、電灯院、安居院、南方には温室院、辰巳（南東）には行幸院、戌亥（北西）には百済院、丑寅（北東）には五重の両塔がありました。一基は、推古天皇、敏達天皇のために、これを建てられ、一基は、聖徳太子の父・用明天皇のために建てられました。

（中略）

安居院といふことは、太子二十四歳の御時、五月、高麗の僧惠慈法師、百済の僧惠聡等、二人の聖人來朝して、四月十四日より七月十五日にいたり、結夏安居の仏道を勤修す。

これ我朝の安居（それまで個々に活動していた僧侶たちが、ある期間、寺院や一定の住居にとどまって外出しないで修行すること）のはじめなり。この寺の額を「西木天一」と書れけり。これに付て、「西木」といふは、西天よりたゞよひ来りし榿檀の事なり。「天」といふは、梵天帝釈等の天衆、日本に仏法流布する事をかんにて、此木を大海にうかべをくり給ひし事を表せり。「八」と云は、これらの八人の天人くだりて、この像を礼敬す。かるがゆへに、「八」と云。又は、彼木、八尺ばかりなると云心か。毎年二月十五日、この寺に、紫雲あまねくたなびけり。かるがゆへに、「一」とのたまふか。又は、大さ一圍といふ心か、とも云々。

（訳）安居院という名は、聖徳太子24歳のとき、5月、高麗（高句麗）の僧惠慈法師と、百済の僧惠聡ら二人の聖人が来て、4月14

日から7月15日まで、結夏安居の仏道修行をしたためです。これが、我が国の安吾の始まりでした。この寺の額を「西木天一」と書かれましたが、この「西木」とは、西天よりただよって来た榿檀の事です。「天」は、梵天帝釈らの天衆が日本に仏法を広げることを感じ、この木を大海にうかべて送り出した事を表します。「八」は、8人の天人がくだって、この像を礼拝したことを表します。又は、この木が8尺であったことであろうのかもしれませんが。毎年2月15日には、この寺に紫の雲がたなびきますので「一」というのか、または、周囲が一圍という意味かともいわれます。

おわりに

流れ付いた不思議な木は、古代には、外来宗教である仏教の象徴でした。しかし、時代を経て、仏教が日本の文化・社会に必要な不可欠な存在として定着すると、流木の物語は、仏教の偉大な力を証明し、重ねて、仏教伝来を促した政治的勢力を擁護する伝説となりました。

そうして、江戸時代、仏教以外の外来宗教の導入を固辞する時代になると、同じ流木の話は、聖徳太子のスーパーパワーの伝説と重なり合い、奇瑞をもたらして人々を救う平和の象徴となり、吉野、大淀町の比叢寺は、天界と人を結ぶその入り口ともいうべき場所に位置付けられました。

人々の様々な思惑をその伝説に隠しながら、仏様は今も微笑んでおられます。もしかしたら、美しい吉野の入り口に建つ寺で、次なる物語が語られることを、楽しみに待っておられるのかもしれませんが。

ちぬ よしの 茅渟と吉野

—放光仏伝承の背景—

はじめに

- 1、離宮と御厨
- 2、放光仏と渡来人
- 3、放光仏と蘇我氏
- 4、放光仏と吉野寺
- 5、王権の神と渡来神

おわりに

大淀町教育委員会

まつだ わたる
松田 度



プロフィール：

1974年大阪市（現此花区伝法）生まれ。同志社大学大学院修了後、同大学歴史資料館研究員を経て2005年より大淀町教育委員会に勤務、現在同文化振興課・主任技師。二児の父で、趣味は家庭菜園とウォーキング。

はじめに

養老4年（720）にできた歴史書『日本書紀』は、日本で最初に彫刻された仏像が、「吉野寺」に安置された、と記しています。

それは大阪湾、古代の茅渟海（ちぬのうみ）に浮かんでいた「光を放つクスノキ」の話からはじまります。伝承の背景にあるのは、当時まことしやかに語り伝えられていた、日本最古の放光仏の由来譚（縁起）です。

「そんなのは作り話でしょ？」そういう意見もあるかもしれませんが。その真偽は問わないとしても、脚色された物語の背景には、核になる「史実」が隠れています。

この小論では、「茅渟」と「吉野」という二つの地域を舞台に、放光するクスノキから仏像が生まれ、吉野の地でまつられるまでのストーリーの深層を探ってみましょう。

なお、この文章では以下、頻出する『日本書紀』を『書紀』と略すことにします。

1、離宮と御厨（みくりや）

茅渟（チヌ）と呼ばれた地域は、今の大阪府南部、旧国名では河内国から分かれた和泉国（いずみのくに）にあたります。『書紀』では具体的に、「茅渟県陶邑（ちぬのあがたのすえむら）」（崇神紀7年条）や「茅渟山屯倉（ちぬやまのみやけ）」（安閑紀元年条割註）の地名、「茅渟県主（ちぬのあがたぬし）」（雄略紀14年条）という氏族が登場します。

チヌの地は5世紀後半から、渡来系のやきもの（須恵器）生産を基盤とした「邑」「県」「屯倉（みやけ）」があり、王権の管理下に置かれていました（註1）。また、大阪湾をチヌの海というのも、チヌ（クロダイ）がよくとれる海産物を象徴した古い地名にもとづいています。チヌの地名には、海とのかかわりの深さも反映されているようです。

今から約1,300年前、元正天皇の霊亀2年（716）3月のこと。河内国和泉・日根

2、放光仏と渡来人

『書紀』によると、放光するクスノキがチヌの海辺に流れ着いたのは、欽明天皇 14 年。このクスノキで、はじめて二体の「国産仏」が造られることになりました。日本列島に「仏教」という考え方がほとんど根付いていない 6 世紀後半の話で、その光るクスノキはあたかも「神」のような扱いです。

注目されるのは、第一発見者として登場する「溝辺直（みそべのあたひ）」。彼は『書紀』（敏達紀 13 年 9 月条）によると、後述する蘇我氏や鞍作氏とともに、初期の仏教普及に力を尽くした「池辺直氷田（いけべのあたひた）」と同じ人物のようです。

平安時代にまとめられた『新撰姓氏録』によると、彼の子孫は和泉国にすむ「諸蕃」の氏族で「坂上大宿禰」と同祖、「阿智王」の後裔とされています。坂上氏は東漢氏（やまとのあやうじ）と称される渡来系の有力氏族で、奈良県南部に拠点をもっていた集団ですが、大阪府一帯にも同族が住んでいたようです。大阪府和泉市仏並町（旧和泉国横山郷）にある、真言宗・佛並寺に伝わる縁起では、池辺直氷田が 2 体の仏像を並べて安置した仏殿こそ、当寺の起源だとします。このあたりには、今でも池辺姓の方が多く、佛並寺の縁起も池辺氏の古い家伝によったものと考えられます。

このように『書紀』の放光仏伝承は、河内国泉（和泉）郡にいた東漢氏系の一族・溝辺（池辺）氏が家伝として保持していたもので、蘇我氏らとともに初期仏教の普及に尽力した渡来人たちの記憶を伝えていると考えてよいでしょう。

ところで件のクスノキは、どのようにし

て仏像に仕上げられたのでしょうか。『書紀』には「画工」に命じて仏像 2 体を造らせたとあります。専門の「仏師」などもない時代ですが、『書紀』の敏達 6 年（577）11 月条には、難波（上町台地）の大別王の寺に「造仏工」がいたと記します。

大別王の寺は百濟系の初期寺院とみられますが、詳細は不明。ただ、外国から来た使節をもてなす迎賓館「難波館（なにわのむろつみ）」や、後述する「難波堀江」に最も近い場所にあったようです（註 5）。当時の難波は日本最大の貿易港でした。そのため、諸王や有力氏族たちも、「難波津」付近に交易の拠点となる家宅をもっていました。

奈良県の飛鳥南淵の坂田（現在の明日香村坂田大字）を本拠とした司馬達等（後の鞍部・鞍作氏の祖）も、放光仏の制作にかかわった可能性があります。後に飛鳥寺の本尊を造った鞍作鳥（止利）はその孫にあたります。鞍作氏は東漢氏と深いつながりがあり、河内国に同族も住んでいました（註 6）。

いずれにせよ放光仏の誕生には、渡来系の知識集団（造仏工）がかかわった（もちろん伝承のうえですが）とみてよさそうです。

ところで、平安時代初期に成立した『日本霊異記（以下、霊異記）』（上巻第 5）では、最初に和泉国の海に漂うクスノキをみつけたのは「大部屋栖野古（おおとものやすのこ）」という人で、池辺直氷田はそれで仏を造ることを蘇我氏から任された、という話になっています。屋栖野古は、同書に「紀伊国名草郡宇治（現在の和歌山市内。紀の川河口域の南岸地域）の大伴連等の先祖」と記されています。また彼は、聖徳太子の近従として活躍したことになっていますので、『霊異記』の伝承は『書紀』の放光仏伝承をもとにして、

聖徳太子と紀伊の大神氏とのかかわりを強調するために作りなおされた物語、ということになりそうです。

3、放光仏と蘇我氏

『靈異記』では、件の放光仏を「豊浦堂(とゆらどう)」という場所に安置したと伝えます。

その候補地、奈良県明日香村豊浦にある向原寺(こうげんじ)の地下には、7世紀初頭の寺院跡とそれより古い石敷きをともなう建物跡がみつかり、『元興寺縁起』などの古代史料にみる「豊浦宮」「豊浦寺」の遺構と考えられています(註7)。

『書紀』によると、欽明天皇13年(552)10月、百済の明王(聖明王)から送られた

釈迦の金銅仏を、蘇我稲目がもらい受けて「小墾田(おはりだ)の家」に安置し、「向原(むくはら)の家」を寺にした、とあります。ここで登場する豊浦・小墾田・向原は、いずれも飛鳥川沿いの地名で、蘇我氏とのつながりが深い場所です。

続いて神仏の信仰をめぐる争いが生じ、仏教興隆派の蘇我氏に対し、それをよく思わない物部氏らの反対派(廃仏派)が寺を焼き払い、仏像を「難波堀江」に流してしまい、仏像は茅渟海の彼方に消えていきました。

放光木が茅渟海に浮かんでいる!という記事はその翌年5月のこと。つまり、失われた仏像のかわりに、翌年、放光するクスノキが流れてきたので、それで初めて仏像を造った、というのが『書紀』の筋書きです。



▲関連地図2 (吉野周辺)

ところで『書紀』は、敏達天皇 14 年(585) 3 月にも、蘇我氏の建てた仏殿や渡来仏を焼き、余りの仏像を「難波堀江」に棄てたとあって、同じ記事が重複します。『靈異記』は、靈木の漂着と豊浦堂への放火を敏達朝のこととしており、池辺直氷田が放光仏を稲の中に隠した、と記します。つまり、日本に伝わった最初の仏像は、欽明朝もしくは敏達朝にすべて棄てられましたが、かわりに「放光仏」が出現した(もしくは、隠しておいたので残った)ということになります。

仏教の受容をめぐる一連の騒動がおさまったあと、その放光仏は再び取り出されず。そして、吉野の「竊(ひそ)寺」(比蘇寺)に安置されたのが光を放つ阿弥陀の像だと、『靈異記』は物語を締めくくります。

以上の物語は、①欽明・敏達天皇の時代、茅渟海に浮かんでいたクスノキの靈木で仏像をつくった。②その仏像は蘇我氏ゆかりの地・飛鳥の豊浦付近の寺に安置された。③その仏像は今、吉野寺(ヒソ寺)に安置されている、ということになります。

ここに登場するのが、蘇我氏とその配下にいた渡来系集団です(ここではソガ氏系集団と呼んでおきましょう)。すでに失われている蘇我氏の「家伝」には、豊浦寺にかかわる放光仏や初期の仏教受容期の伝承が記されていた可能性があります。

かりに、この放光仏の伝承が『書紀』成立段階での創作だとしても(註8)、その背景にあるソガ氏系集団の古伝承は、7 世紀ごろには存在していたとみてよいでしょう。

同様に、これから述べる「吉野寺(ヒソ寺)」にまつわる物語も、日本最古の放光仏伝承が、『書紀』に採用されるくらい、よく知られていたのでしょう。

4、放光仏と吉野寺

吉野寺については、『書紀』にたった一行登場するのみで、手がかりは「放光仏」を安置する寺、というだけです。ただし、飛鳥時代にさかのぼる寺院を吉野郡内で探すと、大淀町比曽の世尊寺境内にある「史跡比曽寺跡」以外に存在しません。そこで、この古代寺院を詳しくみてみましょう。

比曽寺跡は、現在の大淀町比曽(上比曽)に位置しています。北側に高取山系を背負い、東西を川に挟まれ、南に大峯連山をみはるかす景勝の地にあります。奈良時代には比曽(比蘇)寺、平安時代以降は法号の現光寺の名で呼ばれています。今はその地に曹洞宗・世尊寺が建っており、寺宝とともにその法灯が受け継がれています。

境内からは、サヌカイト製の石器、5 世紀後半の須恵器なども採集されています。放光仏との関係で注目されるのは、7 世紀中頃の瓦です。これは、ソガ氏系集団が関与した古代寺院からみつかると、飛鳥時代の瓦の文様の系譜をひくと考えられます(註9)。

7 世紀中頃といえば、著名な「乙巳(いっし)の政変」(645 年)があります。この政変で蘇我系の王統が途絶え、中大兄(後の天智天皇)を中心とする非蘇我氏系の王統が主流となります。

蘇我系王統最後の有力者だった古人(ふるひと)大兄皇子は、政変直後に僧の姿となり、難を逃れて飛鳥から吉野へ移りました。『書紀』によれば、彼は「吉野太子」とも呼ばれていました。彼の拠点(後の比曽寺)と考えられています。

ぼくは、古人大兄の入寺以前、当地には彼の拠点としての「皇子宮(みこのみや)」があっ

たと考えています。宮滝遺跡に造営された齊明朝以降の「吉野宮」と区別するため、ぼくはこれを「古・吉野宮（こ・よしののみや）」と呼んでいます（註10）。そして、僧となった古人大兄の吉野入りを機に、この「古・吉野宮」に重複もしくは隣接するかたちで「吉野寺」が創建されたと考えています。

宮と寺が重複・隣接することは、飛鳥時代においては珍しくありません。その造寺工として働いたのも、彼の配下にいたソガ氏系集団と想定されます。その吉野寺の本尊として迎えられたのが、蘇我氏ゆかりの「豊浦堂（豊浦寺）」に安置されていた「放光仏」だった、とぼくはみています。

古人大兄の一族は、吉野入りの数ヵ月後、クーデターをおこそうとしましたが、内部告発で瓦解。中大兄ら非蘇我系の勢力によって滅ぼされます。ただし、古人大兄の女子・倭姫王（やまとひめのおおきみ）は中大兄の太后となり、飛鳥寺・豊浦寺をはじめとするソガ氏系集団の諸寺院も、引き続き維持されています。

また、中大兄と蘇我越智娘（おちのいらつめ）の間に生まれた女子たちは、中大兄の弟・大海人皇子（後の天武天皇）に嫁いでいます。その一人が、後に持統天皇となった鸕野讃良皇女（うののさららのひめみこ）です。ぼくは彼女が、ソガ氏系集団が所有していた土地や寺院などの財産を受け継いだのではないかと考えています。

ソガ氏系集団の母体となった東漢氏につながる坂上氏の系譜をみると、吉野郡には平安時代にも「文忌寸（ふみのいみき）」が住んでいたようです（註11）。坂上氏は東漢氏系集団の有力氏族で、「忌寸」は主に渡来系の集団に与えられる姓です。

未遂に終わった古人大兄のクーデターですが、参画していた人物のなかに倭漢文直（やまとのあやのふみのあた）麻呂がいます。彼は罪を許され、白雉5年（654）の遣唐使の主要メンバーとなっています。

また、壬申の乱（672年）の際、当初から大海人皇子についていた舍人（とねり）のなかに、書直智徳（ふみのあたいちとく）と書首根麻呂（ふみのおびとねまる）がいました。

文直（書直）・書首は後に「文忌寸」となりますが、彼らはいずれも吉野にゆかりがあった人物とみられ、先の「吉野郡の文忌寸」とも関連がありそうです（註12）。

比曾寺跡の南方にあるトノカイト遺跡は、飛鳥時代後半の土器や須恵器、瓦、珍しい文房具の硯なども採集されており、書氏等の居住候補地として最適です（註13）。書（文）氏を代表とするソガ氏系集団は、トノカイト遺跡付近に拠点をもち、「吉野寺」の維持管理にもかかわったとみてよいでしょう。大海人皇子と鸕野讃良皇女が吉野入りした際、彼等が物心ともに支援者として活躍したことも、容易に想像できます。

このように考えると、吉野寺と日本最古の放光仏伝承をふくむソガ氏系集団の「遺産（レガシー）」は、古人大兄が滅ぼされた後も、鸕野讃良をはじめとする蘇我系の皇女たちと、彼女等を支えた書氏らによって受け継がれていたのではないのでしょうか。



▲大淀町比曾トノカイト遺跡の硯片

5、王権の神と渡来神

さて、これまでにみてきた放光仏の類似伝承として、『書紀』の三輪山伝承（神代上・第8段一書の6）に、興味深い渡来神の物語があります。それはこんな話です。

国造りの神・オオアナムチに対し、海の向こうから光を放ち、海を照らしてやってきた神がいました。名をたずねると「わたしはお前の分身（幸魂・奇魂）だ」といいます。オオアナムチはいちおうそれで納得して、あなたはどこに住みたいのかと問うと、その「分身」は「日本国の三諸山に住みたい」といったので、オオアナムチは「宮」を造って三諸山（三輪山）の麓に鎮座させました。これが「大三輪の神」です。

この物語は『古事記』（上巻・大国主神の段）にも類似伝承があります。この「海を照らしてより来る神」（渡来神）は、まさに「チヌの海で放光するクスノキ」と同じモチーフ。ここでは、オオアナムチという神の「分身」、という位置づけです。

平安時代に物部氏の後裔たちがまとめた『先代旧事本紀』の「地神本紀」には、こんなオオアナムチの物語もあります。

大己貴（オオアナムチ）という神が、大鷲に乗り、妻にふさわしい女性を求めて「茅渟県」へやってきます。神は、当地で須恵器生産をつかさどる陶祇（すえつみ）の女子である活玉依姫（いくたまよりひめ）のもとへ通い始めますが、なかなか正体を明かしません。

あやしく思った姫の父母は、その神の服の裾に糸をとおしました。あくる朝その糸を追いかけていくと、「茅渟山」を経て「吉

野山」に入り、「三諸山（三輪山）」に留まっていた。そこでこの神は、大三輪神社の神・オオアナムチだとわかったのです。

この物語の主人公・オオアナムチは、欽明朝（6世紀後半）以降、王権を守護する「国家創成の神」としてあがめられていました。

『書紀』は欽明朝の王宮として、三輪山西麓にあった「磯城嶋金刺宮（しきしまのかなさしのみや）」の名を伝えています。その付近には、王権の神をまつる「斎場（カンナビ）」も営まれていたと考えられます。

その王宮や斎場の造宮には、当時政権を担っていたソガ氏系集団に加えて、三輪山西麓に本拠を置いて活躍した「ミワ氏系集団」が関与したとみてよいでしょう（註14）。

ミワ氏系集団はもともと三輪山西麓に本拠をもっていたわけではありません。チヌ（茅渟県陶邑）に住んでいたミワ氏系集団の祖先神が「陶祇」。彼等の周辺には「陶（須恵器）」の製作技術者だけではなく、道教的思想を背景とする様々な渡来系の知識集団がいました（註15）。

先述の物語は、7世紀末頃、三輪山の西麓に氏神社（現在の大神神社）とその神宮寺（大御輪寺）を造った大三輪氏の祖先伝承と考えられます。彼らもまた、チヌにいた王権傘下の渡来系氏族を束ね、東漢氏系集団と同じく6・7世紀頃に蘇我氏との関係を強め、「放光する渡来神」を奉じて王権に仕えた氏族集団でした（註16）。

なお、『書紀』成立頃（8世紀初頭）になると、オオアナムチは国神（くにつかみ）の筆頭とされ、「大国主（おおくにぬし）」と名を変えて、島根県（出雲国）の杵築大社（出雲大社）でも奉祭されるようになります。

放光仏・放光神伝承の色濃いチヌにも、王権の神・オオナムチをまつる斎場（カンナビ）があったようです。その場所は、古代の和泉国大鳥郡上神（かむつみわ）郷（今の堺市南区の一部）にあたる鉢ヶ峯（はちがみね）。ミワ氏系集団の拠点の一つです。

そこには、名刹・法道寺（長福寺）の伽藍に接して、『延喜式』（神祇9・神名上）に記載する「国神社」の祠跡が残っています。

鉢ヶ峯は、和泉国唯一の式内名神大社・大鳥神社（堺市西区鳳北）の「奥院」とも、「オオナムチ降臨の地」とも伝えられていたようです。郡名にもなっている「大鳥」は、先の『先代旧事本紀』の伝承にいう、オオナムチの乗り物「大鷲」に、鉢ヶ峯が「茅渟山」にあたるかと考えてよいでしょう。

吉野にも、オオナムチをまつる式内名神大社「大名持神社（おおなもちじんじゃ）」があります。『日本三代実録』によると、貞観元年（859）正月27日には、正一位という

最高位の神格に叙せられています。その時点で正一位の神格を与えられていたのは、大和国の「春日祭神四座（現春日大社）」の二神（タケミカツチ・イワイヌシ）だけでしたので、「吉野のオオナムチ」がいかに重要視されていたかがわかりますね。

今「大名持神社」の社殿が建っているのは、吉野川を見下ろす妹山樹叢の南側（吉野郡吉野町川原屋）ですが、その斎場（カンナビ）はもともと「吉野宮（離宮）」、つまり宮滝遺跡にあったと考えられます（註17）。

宮滝遺跡には、7世紀後半頃の斎場（カンナビ）の中心施設とみられる苑池が設けられていました。その周辺でみつまっている須恵器質の「鰐付き土管」は、苑池の給排水に使われたと考えられていますが、ここに渡来系の工人集団の高い技術が採用されています。離宮や斎場の造営にあたり、先にみた吉野寺と同様、ソガ氏系集団が「匠」としてかかわったとみてよいでしょう。



▲宮滝遺跡（註17 文献掲載図を一部改変）

上記の物語は残された伝承の断片にすぎませんが、茅渟・三輪・吉野にあった王権の神・オオアナムチの斎場（カンナビ）を結ぶ物語に、ソガ氏系集団やミワ氏系集団といった渡来人たちの影がほのみえます。

つまり、上述の三つの地域に共通するのは、①古代に王宮や離宮が置かれたこと、②王権の神（オオアナムチ）をまつる斎場（カンナビ）・神社があったこと、そして、③放光仏・放光神の伝承をもつ渡来系集団の存在です。

王権の占有地には、王権の神として、天皇家の「祖先神（守護神）」でもあるオオアナムチがまつられていました。先の物語からは、その王権に結びつこうとする渡来人たちが、オオアナムチとの関係性を語り、自らの祖先伝承を造りあげていったようすもうかがえます。それが、王権の神を助ける放光神・放光仏という発想だったのでしょう。

おわりに

海の向こうからやってくる渡来人・渡来品、渡来文化がいったん陸揚げされて受容され、かたちを変えて内陸部へ流入するまでには、多くの葛藤があったことでしょう。

渡来人たちが、日本列島の各地域でどのように受け止め、受け入れられていったか、その過程を明らかにするため手がかりが「放光仏の伝承」にあります。

池辺直もしくは大部屋栖野古が見つけた放光木は、信仰体としての「仏」に変わり、飛鳥の豊浦寺を経て、王権のカンナビに程近い「吉野寺」に安置されました。

これは、政治的な意味合いを含む「仏教公伝」ではありませんが、渡来人たちのなかに記憶された仏教受容のひとつのかたちとい



▲世尊寺本尊・放光樟像

えるでしょう。それがどうして『書紀』に遺されていたのかは、その背景も含めてこれから大いに考えてみる必要があります。

世尊寺の本尊として今もまつられている放光樟像（木造阿弥陀如来坐像）は、近年の調査により元禄 13 年（1700）に「再興」されたものであることが明らかとなりました。幻の放光仏は 1,300 年という長い年月のなかで失われ、残るものは『書紀』にはじまる伝承だけ、ということになります。

しかし、その伝承があるゆえに、「吉野寺」は、多くの困難を乗り越え、復興を繰り返して今につながっています。あらためて伝説がもつ底力の強さを思います。

註

- (1) 鷲森浩幸「屯倉の存在形態とその管理」『日本古代の王家・寺院と所領』塙書房 2001 年。松田度「茅渟県陶邑再考」『文化史学』第 60 号 同志社大学文化史学会 2004 年。森田喜久男「古代王権の山野河海支配と〈禁処〉」『日本古代の王権と山野河海』2009 年。
- (2) 奈良県立橿原考古学研究所「宮滝遺跡調査報告会・遺跡解説 資料」（2019 年 8 月 31 日）、同「発掘 古代の宮滝遺

- 跡」令和元年度 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館出張企画展リーフレット 2019年。
- (3) 松田度「僧形の皇子たち—いざ、吉野へ—」『吉野宮の原像を探る』平成28年度大淀町地域遺産シンポジウム資料集 2016年。
- (4) 遠藤慶太「和泉のミヤコー和泉監の構成要素—」『都市文化研究』第4号 2004年。
- (5) 「難波館」は敏達紀12年条などに、「難波大郡」は推古紀16年条などに、「難波堀江」は仁徳紀11年条、欽明紀13年条、敏達紀14年条にあり。
- (6) 佐伯有清「貴族文化の発生」『岩波講座日本歴史 古代2』岩波書店1975年。
- (7) 醍醐寺所蔵『元興寺縁起』所収の「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」には、天平19年(747)2月11日の日付があり、8世紀中頃に成立した可能性もありますが、実際には平安時代の終わり頃に書かれたものと考えられています(吉田一彦「『日本書紀』仏教伝来記事と末法思想」『仏教伝来の研究』吉川弘文館2012年)。
- (8) 註(7) 吉田2012年。
- (9) 成瀬匡章ほか「吉野郡内の古代寺院—比叢寺跡を中心として—」『由良大和古代文化研究協会 研究紀要』第19集 2015年。
- (10) 註(3) 松田2016年。
- (11) 『群書類従』巻第185の「坂上系図」逸文「弟腹 爾波伎直(にわきのあたい)」の系図にあります。
- (12) 註(11)「坂上系図」によれば、吉野郡に「榎井(えのい)忌寸」もいました。彼らも東漢氏の一族で、古人大兄のクーデターに加担した「物部朴井(えのい)連椎子」と関係するかもしれません。
- (13) 註(3) 松田2016年。
- (14) 松田度「茅渟と三輪—湯山古墳の被葬者像—」『森浩一に学ぶ 森浩一先生追悼論集』2015年。
- (15) 註(14) 松田2015年。
- (16) 註(1) 松田2004年および註(14) 松田2015年。
- (17) 松田度「王権のカンナビー〈吉野宮〉の成立背景—」『橿原考古学研究所論集 第16』2013年。

<引用史料の出典>

- 古事記(712年成立):『新編日本古典文学全集1』小学館1997年。
- 日本書紀(720年成立):『新編日本古典文学全集2<全3冊>』小学館1994年。
- 日本国現報善悪霊異記(日本霊異記・9世紀前半頃成立):『新編日本古典文学全集10』小学館1995年。
- 続日本紀(8世紀末成立):『新訂増補国史大系 第2巻』吉川弘文館2000年。
- 日本三代実録(901年成立):『新訂増補国史大系 第4巻』吉川弘文館2000年。
- 先代旧事本紀(9世紀頃成立):『新訂増補国史大系 第7巻』吉川弘文館2002年。
- 延喜式(10世紀頃成立):『新訂増補国史大系 第26巻』吉川弘文館2000年。
- 新撰姓氏録(815年成立):北川和秀「新撰姓氏録」氏族一覽 2019年9月閲覧。
<http://kitagawa.la.coocan.jp/data/shiji.html>

吉野路の微笑仏

びしょうぶつ

～世尊寺を守り伝える～

世尊寺住職 もとやま いちろ
本山 一路

プロフィール：

1939年、吉野郡宗検村阪巻（現五條市西吉野町阪巻）で生まれる。小学6年生のときに先代住職（父）とともに大淀町比曽・世尊寺へ。37年間の教員生活を経て、1981年に世尊寺第20代を継承。現在にいたる。



世尊寺について

南朝の哀史で知られている吉野山と吉野川を挟んで対峙する、大淀町比曽（ひそ）の山里に、古くは吉野寺、比蘇（曽）寺、現光寺などと呼ばれた古刹があります。現在は、世尊寺と称する曹洞宗の寺院です。

用明天皇2年（587）、聖徳太子が父帝への孝養のために建立したと伝えられ、「比曽のお太子さん」と親しまれています。

南面する山門から鎮守社を通過すると、中門の手前左右に、東西両塔跡の礎石が目に入ります。東塔は、太子が父・用明天皇のため建立と伝えますが、豊臣秀吉が文禄三年（1594）に伏見城へ移し、それを慶長六年（1601）、徳川家康が近江大津の三井寺（みいでら）へ移し、今も国の重要文化財として大切に保存されています。

なお、西塔は推古女帝が夫の敏達天皇のため建立しましたが、南北朝の戦乱で焼失したと伝えています。



▲世尊寺山門

中門を入ると、鐘楼、庫裏院、本堂、太子堂が回廊で結ばれ、中門前には金堂跡の八個の礎石が整然と並んでいます。

正面の本堂には、「吉野路の微笑仏」の愛称で親しまれる古い阿弥陀如来坐像が安置されています。『日本書紀』によると、欽明天皇14年（553）、茅渟（ちぬ）の海（大阪湾）に美しく光輝く樟が発見され、天皇はそれで仏像を造らせた。その仏像が今「吉野寺」に安置されている「放光樟像」だ、と記しています。

また、推古天皇3年（595）には、淡路島に長さ八尺、太さ一抱えもある大木が漂着。漁師が発見し、素晴らしい芳香を放つ香木とわかり天皇に献上、天皇は百済の匠に観音像を造らせ、吉野の比蘇寺にまつた、と『聖徳太子伝暦』に記載されています。

このように当寺は、飛鳥時代の吉野の地で唯一の寺院としてひろく知られており、昭和2年（1927）4月8日、境内全域（約7,300㎡）が、国史跡「比叡寺跡（ひそであと）」となっています。

奈良時代から平安時代には、神叡（しんえい）・道璿（どうせん）といった古密教の高僧たちや、若き日の空海などが、山岳修行のために入寺しました。隆盛を極めるなかで、上皇や貴族をはじめ、多くの文人墨客が絶え間なく来山していました。

しかし、その後は衰微し、鎌倉時代には無住が続き、堂塔も戦国時代末期に焼失しましたが、江戸時代に再興されました。唯一再興時の建造物として残る太子堂（奈良県指定文化財）は、瓦の銘文や建築様式から、享保7年（1722）の再建と推定されます。仏壇部（内陣）を角屋（つのや）として突き出す形式は県内でもあまり例をみないものです。

本堂裏には「壇上桜（だんじょうざくら）」の朽ち倒れた古木があり、太子お手植えと伝えられています。その古木から何本もの新しい桜が幹を伸ばす姿は今もなお人々のなかに生き続ける太子の信仰の花のようです。

世にさかる花にも念仏まうしけり

貞享5年（1688）、当寺に参詣した松尾芭蕉の句碑が、その古木の傍らに静かに佇んでいます。

住職として思うこと

当山は、江戸時代中ごろ宝暦（ほうれき）元年（1751）に、大坂・大道寺の雲門即道（うんもんそくどう）禅師を迎えて、霊鷲山世尊寺として復興しました。

雲門さんの立派な彫像は、本堂内陣の背面におまつりしています。

以来、当山は曹洞宗なのですが、先に記したとおり、「吉野路の微笑仏」をまつる古刹として、宗派にこだわらずお参りいただけるお寺と思っています。

私は、昭和14年（1939）に西吉野で生まれ育ちました。父が世尊寺の住職となってここへ来たのが71年前で、当時は戦後の面影が境内の所々にのこっていました。教員として長年勤めましたが、父の後を継ぎました。私で20代目の住職となります。

多くの皆さんに気軽に訪ねていただけるよう、境内には四季折々の花木を植えており、「ちょっと一服していきましょか」「花を見せてもらいに行きましょか」と、心もませていただける「一服寺」でありたいと思っています。



▲境内の花「オオヤマレンゲ」（5月）

境内は、周辺の駐車場や畑を含めて7,300坪あり、その維持管理が一番たいへんです。境内の古い建築や塔跡の礎石、石塔、石灯籠、本堂のご本尊をはじめ諸仏・宝物をどうおまつりし、守っていくかということ、常に考えています。

当山の役員さんにも年2回、清掃活動などの奉仕をいただいています。今まで私がしていた樹木・花木の剪定は、今は町のシルバーセンターにお願いしています。

平成20年(2008)5月には、寺所蔵の「現光寺縁起絵巻」の特別公開をおこない、そのときも地元の方々が解説のサポートを買って出してくれました。

建物や土地が国の史跡地になっていますので、手を加えたり改善したりするうえで必ず関係機関の許可が必要になりますので不便を感じる時もありますが、こうやって寺を支えてくださる方々がいるおかげで、境内や史跡の維持管理、そして活用につながっています。

平成31年(2019)4月29日には、「平成最後のおたっさん」ということで、恒例の聖徳太子報恩大会式がおこなわれました。本堂では大般若経の転読と大塔婆供養、境内では子どもたちも参加しての千本づきなどがあります。最後のごくまきは、例年多くの参拝者でにぎわっています。大人たちが空を舞う巨大なカサゴクを奪い合うので「けんかまつり」とも呼ばれています。

この時にあわせて、長年の課題だった太子堂の修理事業が終わり、堂内を参拝者に開放することができました。

また、本堂の方に仮安置されていたご本尊の聖徳太子像も、太子堂の内陣にお戻りになりました。ほっとしています。



▲「現光寺縁起絵巻」特別公開のようす

本堂脇の十一面観音立像は、平成18年(2006)3月に県指定文化財となりましたが、奈良時代の像で傷みも激しく、地震対策など不安もありました。ようやく平成26年(2014)6月から1年間をかけて修理することができました。

来年(令和2年・2020年)の1月15日(水)から3月8日(日)まで、東京国立博物館の特別展「出雲と大和」に出展されることになっています。このお像が東京へ行くのは初めてのことで、私も東京へ行くことはめったにありませんが、今回はぜひ博物館で見せていただこうと思っています。

今後の課題として、今年で80歳になる私を含めて、関係者の高齢化が進み、お寺の維持管理が困難になってきています。

また、参詣、探索、花見客のためのトイレ増設や、休耕地・施設の有効利用と保存・管理など、気がかりが山積みです。地域の過疎化にも不安がよぎります。奈良県や町の担当者とも話し合っ、ひとつずつ解決していきたいと思います。

これまでの寺の護持、諸行事の裏方として支えてくれた檀信徒や地域のみなさんをはじめ、長年にわたり苦勞をかけた家族にも感謝しています。



現光寺縁起絵巻の世界

制作：大淀町・大淀町教育委員会

积文：公益財団法人元興寺文化財研究所 高橋平明
協力：日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
株式会社アド近鉄・宗教法人世尊寺



現光寺縁起絵巻

(奈良県吉野郡大淀町・世尊寺所蔵)



吉野郡最古の寺院、比叢寺（比蘇寺・現光寺）に伝わったものです。飛鳥時代の創建から、鎌倉時代の再興、後醍醐天皇の行幸までの当寺の縁起が絵と詞書で記されています。

上下2巻。両巻あわせた長さは約18.4mに及びます。制作年代は17世紀後半頃と推定。文学・芸術作品としても、当時の吉野の生活の様子を知る手がかりとしても貴重な絵巻。世尊寺所蔵。大淀町指定文化財。

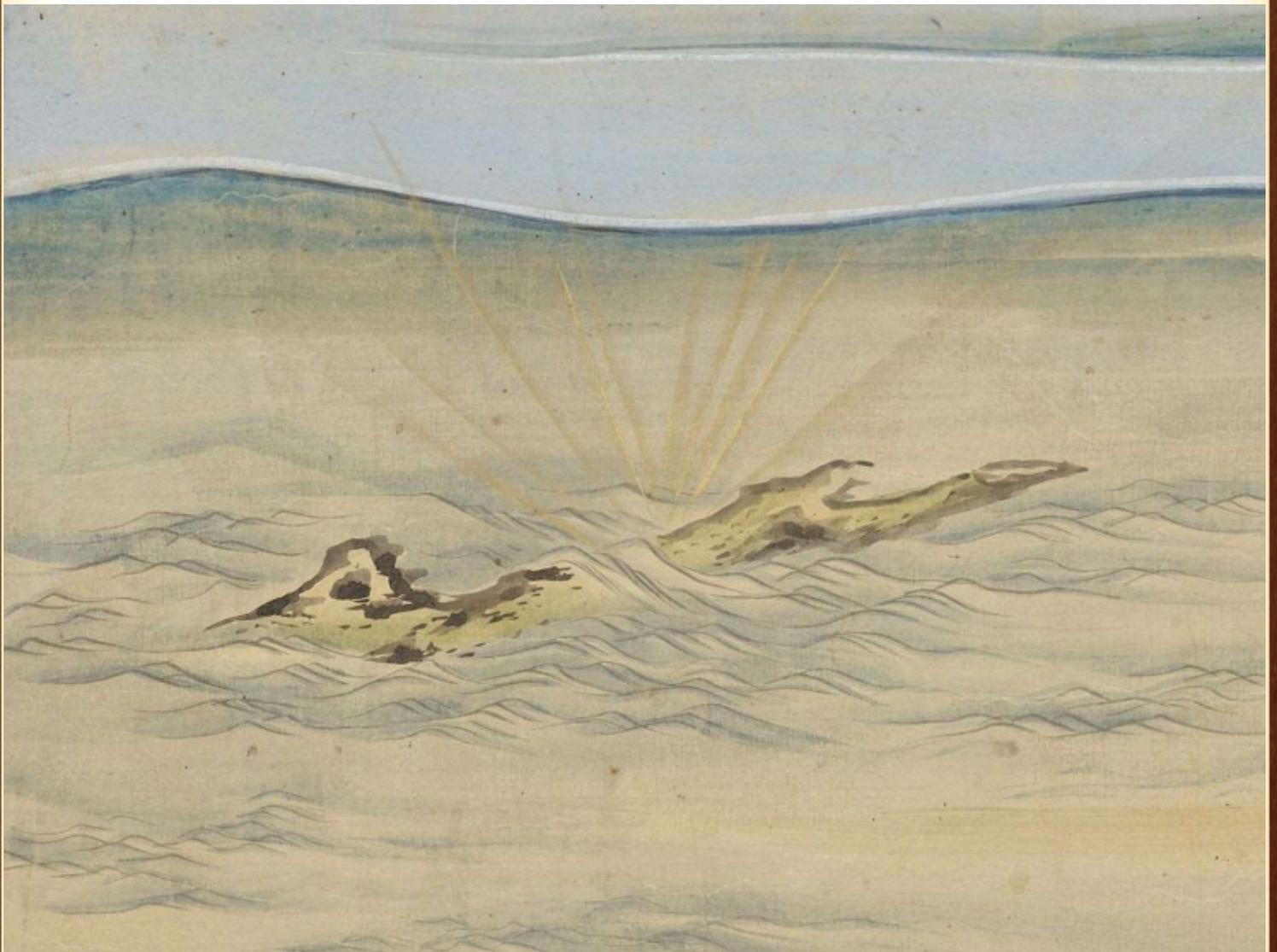


軸先頂部

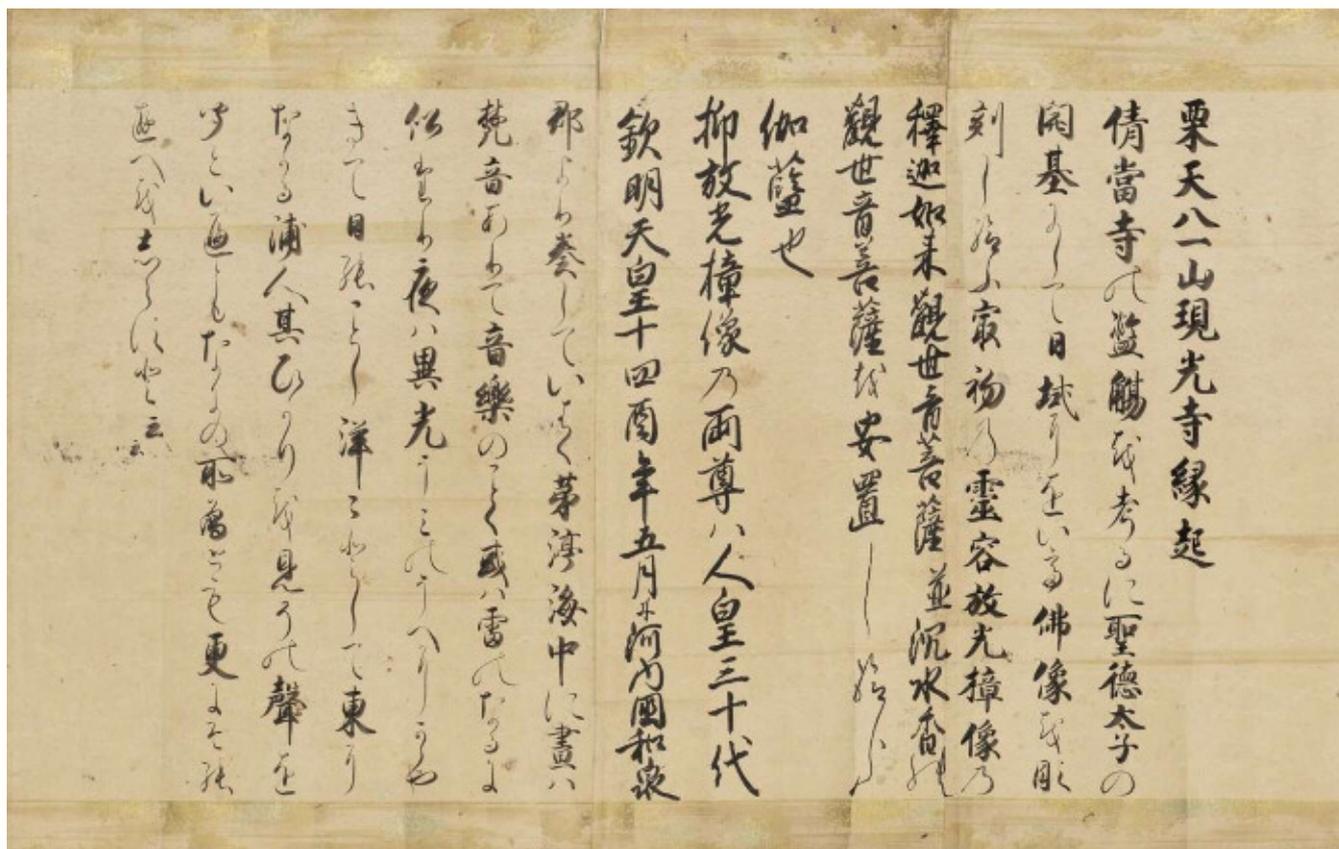
紙本着色	卷子装	上下2巻
脚付黒漆塗箱入り		
題箋	「現光寺縁起 上」	
	「現光寺縁起 下」	
法量	上巻 紙高：35.0cm	全長：895.8cm
	下巻 紙高：35.1cm	全長：943.0cm
構成	上巻 詞：6段 絵：6段	
	下巻 詞：7段 絵：6段	

現光寺縁起絵巻の書誌的情報
(抜粋)

現光寺縁起絵巻 上巻



上巻 第1段 絵（放光するクスノキ）



上巻 第1段 詞

《上巻 第1段 詞》

栗天八一山現光寺縁起

倩(つらつら)当寺の濫觴(らんしょう)を考るに 聖徳太子の開基にして
 日域①にをいて 仏像を彫刻し給ふ最初の靈容
 放光樟像(ほうこうしょうぞう)の釈迦如来觀世音菩薩並
 沈水香(ちんすいこう)の觀世音菩薩を 安置し給ふ伽藍也
 抑(そもそも)放光樟像の兩尊は 人皇三十代欽明天皇
 十四酉年②五月に 河内国和泉郡より奏していはく
 茅渟(ちぬ)海中に昼は梵音ありて音樂のことく
 或は雷のなるに似たり 夜は異光うみのうへにかかやきて
 日のことし 洋洋として東になかる
 浦人其ひかりを見その声を聞といへとも なにの所為とも更に
 そのゆへをしらすと云々

①日本国 ②553年



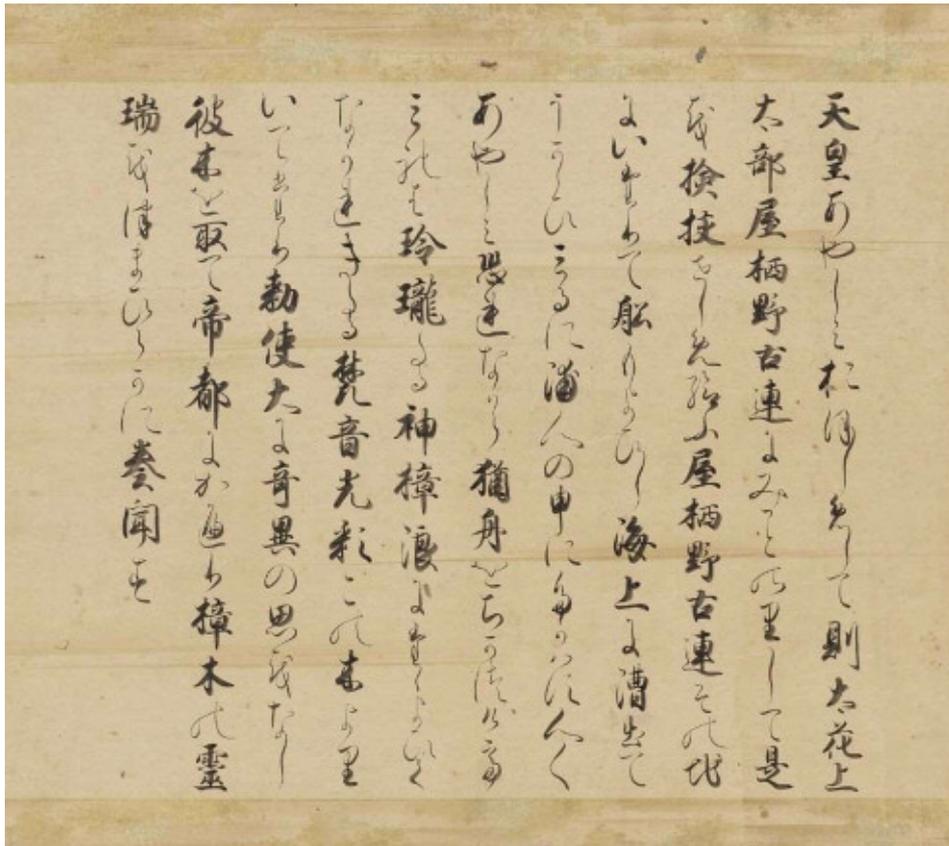
上巻 第1段 絵



上巻 第1段 絵の一部

【上巻 第1段 要約】

欽明天皇十四年、梵音を奏でて光を放つ樟木が茅渟海（ちぬのうみ）を漂流しているとの報告が和泉国より天皇になされる。



上卷 第2段 詞

《上卷 第2段 詞》

天皇あやしみおほしめして
則太花上(だいかじょう) 太部屋栖野古連(おおとものやすのこのむらじ)③に
みことのりして是を檢校せしめ給ふ
屋栖野古連その地にいたりて 船もよいし海上に漕出て
うかかひみるに浦人の申にたかはす
人人あやしみ恐れなから 猶舟をちかつけてみれば
玲瓏たる神樟浪にたたよひて なかれきたる
梵音光彩この木よりいてたり
勅使大に奇異の思をなし 彼木を取て帝都にかへり
樟木の靈瑞をつまひらかに奏聞す

③ 紀伊国名草郡宇治（現和歌山市）の犬伴氏の祖。

『日本靈異記』に拠る。



上巻 第2段 絵



上巻 第2段 絵の一部

【上巻 第2段 要約】

勅使として派遣された屋栖野古連（やすのこのむらじ）は、沖に漂う樟木を引揚げて都に持ち帰り、その靈瑞を天皇に奉聞する。

天皇叡感うきりなく此木はなはた靈妙なり
 妙なりいづれも物造り造りし群臣
 といひ給へともよくわきまへ申人なし
 仍また詔しての給はく人心をもてはかりかたし
 只神託にまかすへしとて
 五十(いそ)太神及三輪太神へうらなひ申させ給ふに
 先三輪太神童にかかりて託しての給はく
 是則天より下し給ふ木也異物につくるへからす
 よろしく仏像につくらは 国中の疫癘(えきれい)
 すみやかにやみなむと云々
 五十太神磐隅皇女(いわくまのひめみこ)④にうつりて
 託宣してのたまはく
 その樟木はこれ吾意也 慎てきけ

《上巻 第3段 詞》

天皇叡感かきりなく 此木はなはた靈妙なり
 いかなる物をか造らむと
 群臣にとひ給へともよくわきまへ申人なし
 仍また詔しての給はく 人心をもてはかりかたし
 只神託にまかすへしとて
 五十(いそ)太神及三輪太神へ うらなひ申させ給ふに
 先三輪太神童にかかりて託しての給はく
 是則天より下し給ふ木也 異物につくるへからす
 よろしく仏像につくらは 国中の疫癘(えきれい)
 すみやかにやみなむと云々
 五十太神磐隅皇女(いわくまのひめみこ)④にうつりて
 託宣してのたまはく
 その樟木はこれ吾意也 慎てきけ

④ 欽明天皇皇女・斎王。

【上巻 第3段 要約】

天皇はこの霊木で何を造るべきか、五十太神と三輪太神とに占わせたところ、ともに仏像に造るべきことを託宣される。



上巻 第3段 絵



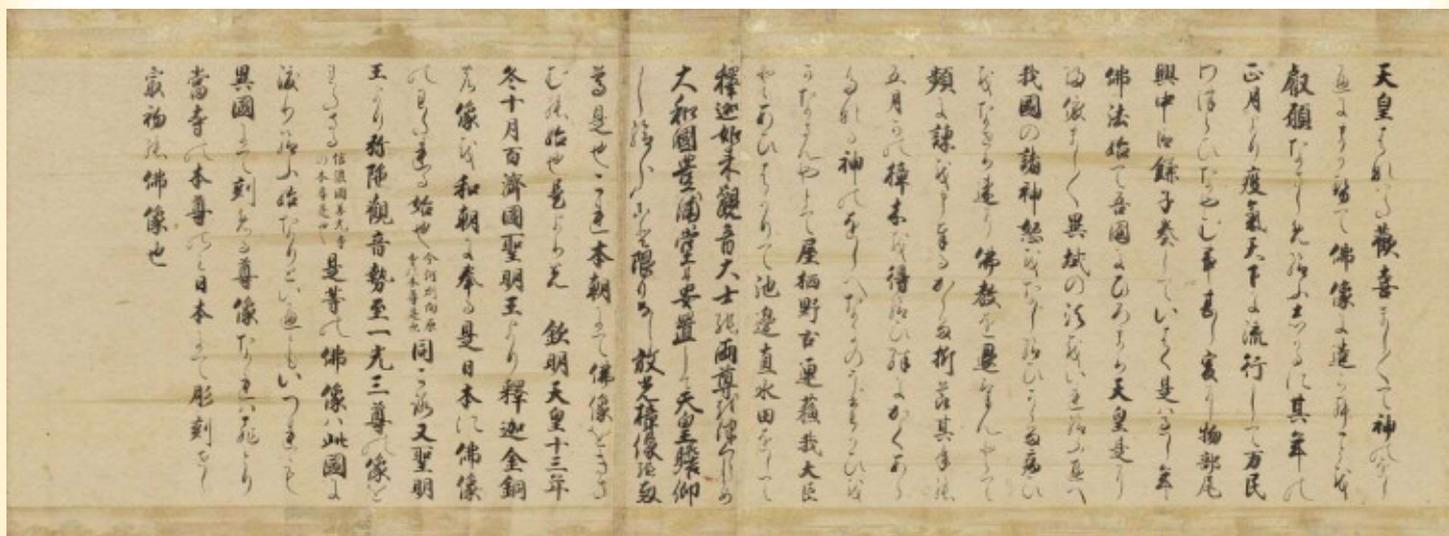
上巻 第3段 絵の一部

《上巻 第3段 詞》 つづき

神代には人の心みな清浄にして正直也
この故に罪咎(つみとが)なし
世をふるにしたかひて 漸人の心すなをならす
異国もまたしかなり
これによて西天に仏出世し給ひて
皇天にかはりて機にしたかひて 法を説給へり
来るへき時いたりて彼教今吾国にいたれり
今よりしては吾託宣をととむ
かの仏の妙なる教にしたかひて
邪をすて正に帰して天下を治め給へ
霊樟を天皇にさつく 仏像に造りて 国中の災害を払ふへし
異国の宝法みな吾国にあつまりて 吾宝祚をたすけり
是我大なるよろこひ也

【上巻 第4段 要約】

天皇が仏像を造ることを命ずると天下には疫病が流行した。物部尾輿と中臣鎌子とは、これを天皇が異域の法に帰依したために我国諸神が怒りをなしたのものとして仏教排斥を称えた。



上巻 第4段 詞

《上巻 第4段 詞》

天皇はなはた歎喜ましまして 神のをしへにまかせて
 仏像に造らむことを勸願なさしめ給ふ しかるに其年の正月より
 疫気天下に流行して 万民わつらひなやむ事甚し
 爰に物部尾輿(輿) (もののべのおこし) 中臣鎌子(なかとみのかまこ)
 奏していはく 是は過(すぎ)し年 仏法始て吾国にひろまり
 天皇是に帰依ましまして 異域の法をいれ給ふゆへ
 我国の諸神怒をなし給ひ かかる病ひをなせり
 速に仏教を退けんとて 頻(しきり)に諫(いさめ)を申奉る
 かかる折節其年の五月 かの樟木を得給ひ
 殊にかくあらたなる神のをしへ なにのうたかひをかなさんやとて
 屋栖野古連蕪(蘇)我大臣⑤とあひはかりて
 池辺直(いけのべのあた)水(氷)田をして 釈迦如来観音大士の両尊を
 つくらしめ 大和国豊浦堂(とゆらどう)⑥に安置して

⑤ 蘇我馬子 ⑥ 豊浦寺 (奈良県明日香村) のこと。

【上巻 第4段 要約】 つづき

一方、屋栖野古連と蘇我大臣とは、池辺直氷田に命じて樟木から釈迦如来と観音菩薩とを造顕させ、大和国豊浦堂に安置すると天皇はあつくこれを信仰した。これらの尊像が放光樟木から造られた当寺の本尊であり、日本で彫刻された最初の仏像なのである。



上巻 第4段 絵

《上巻 第4段 詞》 つづき

天皇瞻迎^(せんげい)⑦し給ふこと限りなし 放光樟像の両尊是也
これ本朝にて仏像をきさむの始也

是より先 欽明天皇十三年⑧冬十月 百済国聖明王より
釈迦金銅の像を和朝に奉る 是日本に仏像のわたれる始也
〔今河州向原寺⑨の本尊是也〕

同ころ又聖明王より 弥陀観音勢至一光三尊の像をわたさる
〔信濃国善光寺の本尊是也〕

是等の仏像は 此国に渡り給ふ始なりといへとも
いつれも異国にて刻める尊像なれば ひとり当寺の本尊のみ
日本にて彫刻せし最初の仏像也

⑦ うやまい迎える。 ⑧ 553年。

⑨ 西琳寺（大阪府羽曳野市）のこと。

かくて樟木兩軀の佛像となり給へは 神の御をしへのことく
 天下の疫氣やみて 国民安隱(穩)の思ひをなせり
 されは上一人より下庶人にいたるまで 尊敬年年にまさり
 仏日ますますかかやけり
 しかる所に三十一代 敏達天皇十四巳年⑩春三月
 物部守屋大連頻に仏法をしりそけ
 仏像を破却せんとくはたて
 守屋連勝海連等をかたらひて 先彼豊浦堂を放火さむと相はかる
 屋栖野古連これを伝へ聞て大に驚歎し
 池辺直水田と相ともに放光の兩尊を ふかく稲の中にかくし置ぬ
 終に守屋おそひ来りて 堂塔に放火して焦土となし
 猶樟像の兩尊をさかすといへともえすなりぬ
 元治四年ぬ

上卷 第5段 詞

《上卷 第5段 詞》

かくて樟木兩軀の仏像となり給へは 神の御をしへのことく
 天下の疫氣やみて 国民安隱(穩) (あんのん) の思ひをなせり
 されは上一人より下庶人にいたるまで 尊敬年年にまさり
 仏日ますますかかやけり

しかる所に三十一代 敏達天皇十四巳年⑩春三月

物部守屋大連頻(しきり)に仏法をしりそけ

仏像を破却せんとくはたて

守屋連勝海連等をかたらひて 先彼豊浦堂を放火さむと相はかる

屋栖野古連これを伝へ聞て大に驚歎し

池辺直水田と相ともに放光の兩尊を ふかく稲の中にかくし置ぬ

終に守屋おそひ来りて 堂塔に放火して焦土となし

猶樟像の兩尊をさかすといへともえすなりぬ

⑩ 585年。



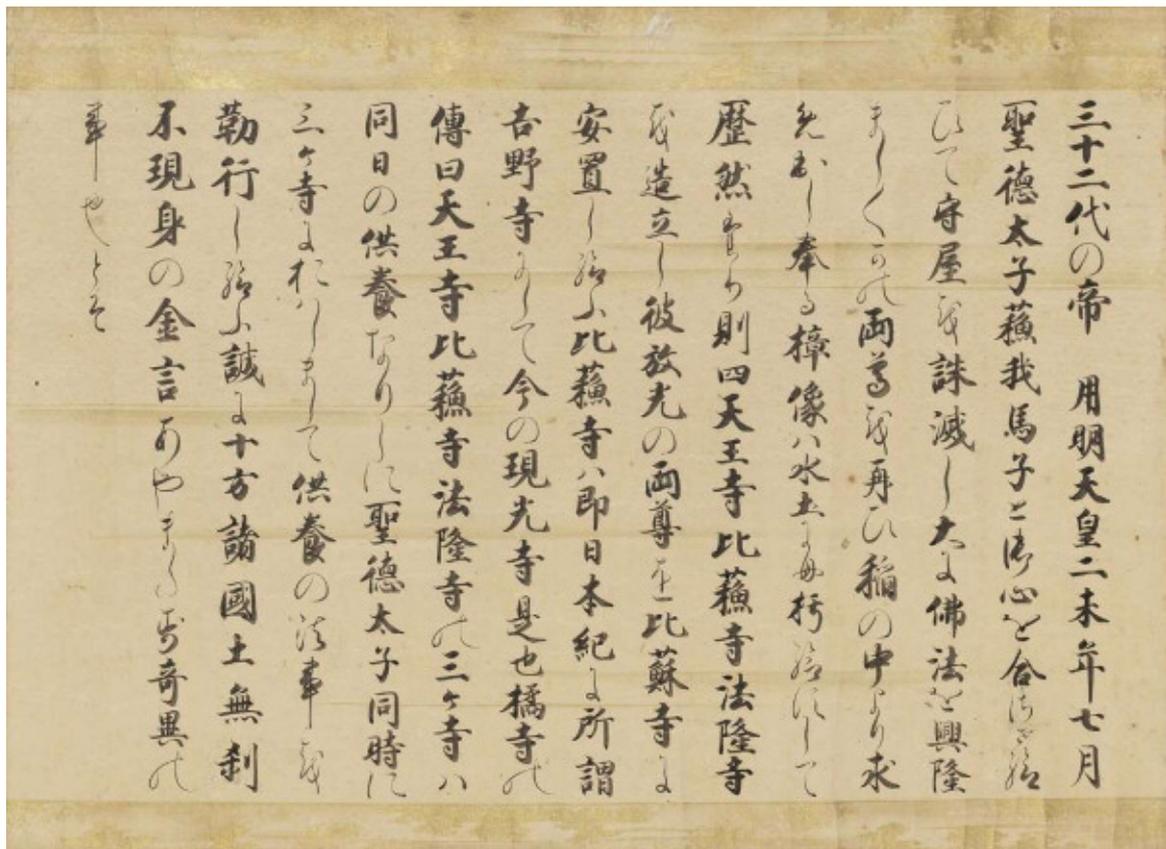
上巻 第5段 絵



上巻 第5段 絵の一部

【上巻 第5段 要約】

樟木が二体の仏像となると天下の疫病は止み、人々は仏教をますます尊崇した。ところが、敏達天皇十四年、物部守屋連らは仏教排斥として豊浦堂に放火した。屋栖野古連と池辺直氷田は、両尊を堂から取り出して稲の中奥深くに隠したので焼失を免れた。



上卷 第6段 詞

《上卷 第6段 詞》

三十二代の帝 用明天皇二未年^①七月 聖徳太子蕪(蘇)我馬子と
御心を合させ給ひて守屋を誅滅し 大に仏法を興隆ましまし
かの兩尊を再ひ稲の中より求め出し奉る
樟像は水土にも朽給すして歴然たり
則四天王寺比蕪(蘇)寺法隆寺を造立し
彼放光の兩尊を比蘇寺に安置し給ふ
比蕪(蘇)寺は即日本紀に所謂吉野寺にして 今の現光寺是也
橘寺の伝曰
天王寺比蕪(蘇)寺法隆寺の三ヶ寺は 同日の供養なりしに
聖徳太子同時に三ヶ寺におはしまして 供養の法事を勤行し給ふ
誠に十方諸国土無刹不現身の金言あやまたす 奇異の事也とそ

① 587年。



上巻 第6段 絵

【上巻 第6段 要約】

用明天皇二年、聖徳太子は蘇我馬子とともに物部守屋を誅滅し、仏法を大いに興隆した。樟木の両尊を稲の中から探し出したが、不思議なことに傷みもなく比蘇寺に安置した。

比蘇寺とは、吉野寺のことであり、今の現光寺のことである。



上巻 第6段 絵の一部

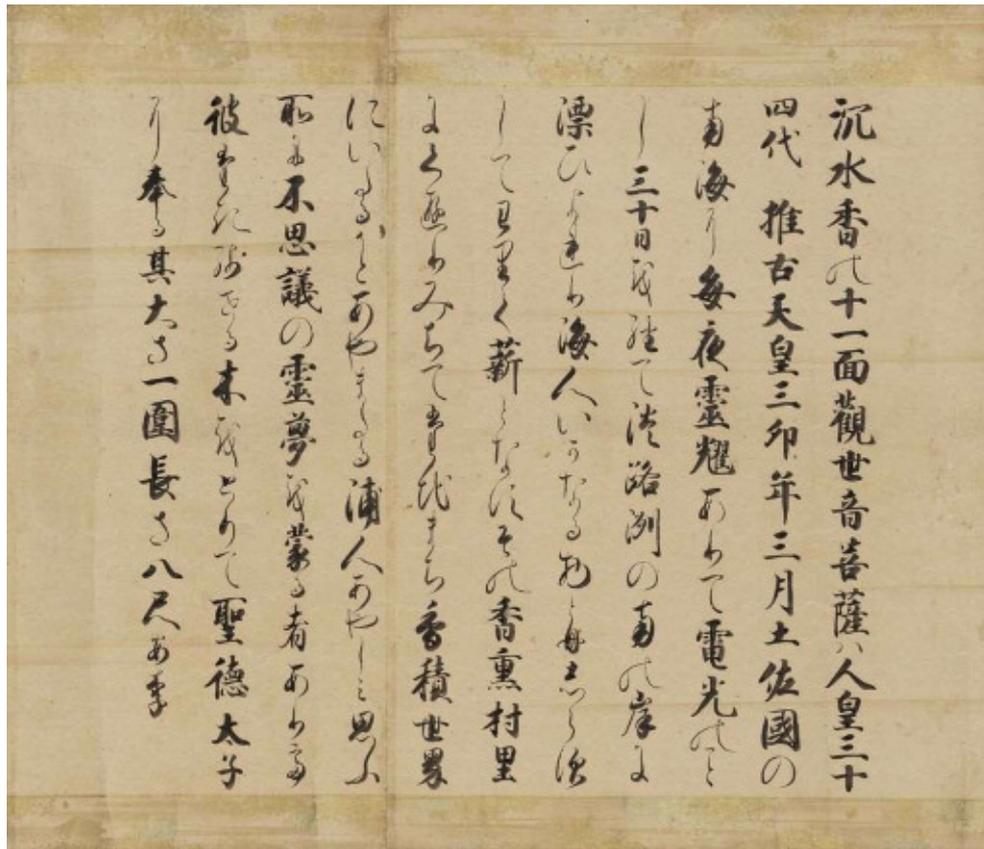


世尊寺本尊・放光樟像（木造阿弥陀如来坐像）

現光寺縁起絵巻 下巻



下巻 第6段 絵 (天皇の行幸)



下卷 第1段 詞

《下卷 第1段 詞》

沈水香の十一面觀世音菩薩は
人皇三十四代 推古天皇三卯年^⑫三月 土佐国の南海に
毎夜靈耀ありて電光のことし
三十日を経て淡路洲の南の岸に漂ひよれり
海人いかなる物ともしらすして わりて薪となす その香薫
村里にくゆりみちて たちまち香積世界にいたるかたあやまたる
浦人あやしみ思ふ所に 不思議の靈夢を蒙る者ありて
彼たき残せる木をとりて 聖徳太子に奉る
其大さ一圍長さ八尺あり

⑫ 595年。



下巻 第1段 絵

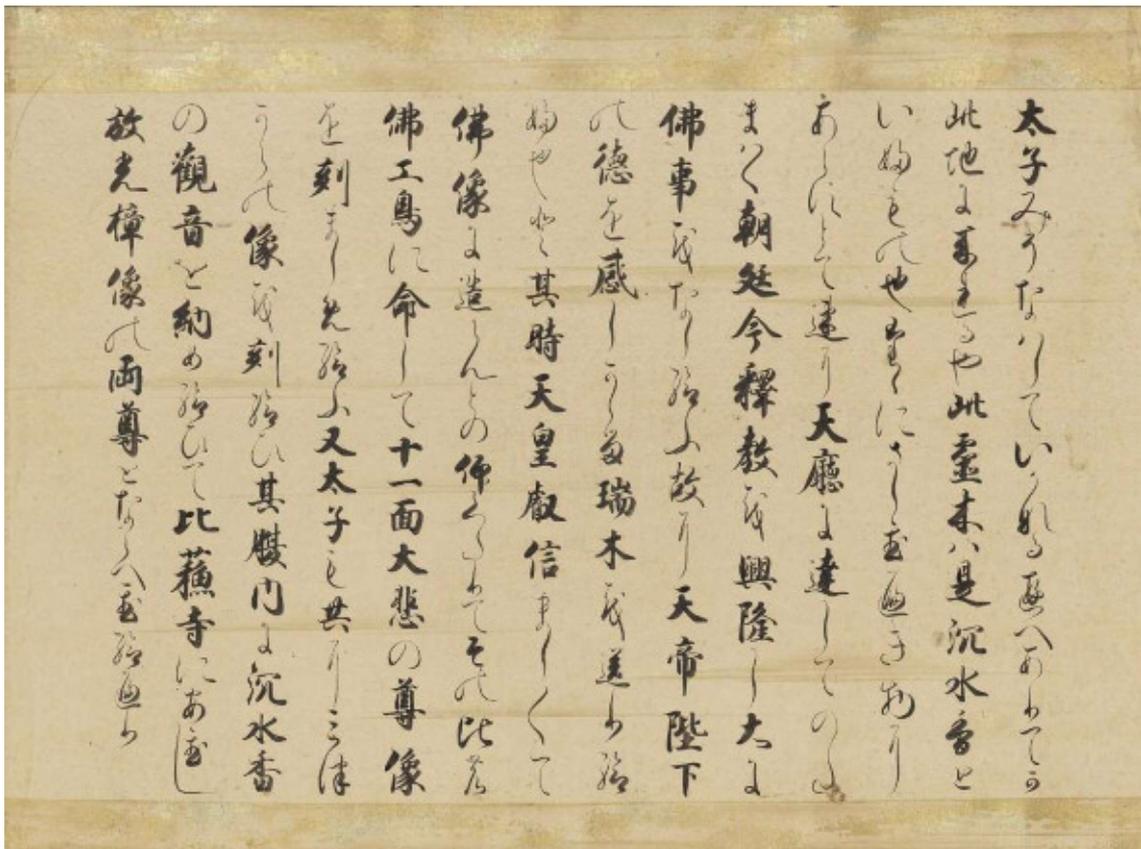
【下巻 第1段 要約】

推古天皇三年、土佐国の南海に、毎夜、雷光のように光を発する「沈水香」という木があり、三十日後、淡路国の南の岸に漂着した。

海人がこれを薪にすると、香薫が村里に満ち満ちて、この世のこととは思えないほどであったので、これを聖徳太子に献じた。



下巻 第1段 絵の一部



下巻 第2段 詞

《下巻 第2段 詞》

太子みそなはして いかなるゆへありてか此地に来れるや
此靈木は是沈水香(ちんすいこう)⑬といふもの也
たたにさし置くへき物にあらずとて
速(すみやか)に天庁に達してのたまはく 朝廷今釈教を興隆し
大に仏事をなし給ふ 故に天帝陛下の徳を感じ
かかる瑞木を送り給ふ也と
其時天皇叡信ましまして 仏像に造らんと仰くたりて
その比(ころ)の仏工鳥⑭に命して
十一面大悲の尊像を刻ましめ給ふ
又太子も共にみつからの像を刻給ひ
其腹内に沈水香の観音を納め給ひて 比蕪(蘇)寺に安置し
放光樟像の両尊とならへ置給へり

⑬ 香木の種類。木質が重く水に沈むの意。

⑭ 仏師鞍作鳥。止利仏師とも。



下巻 第2段 絵

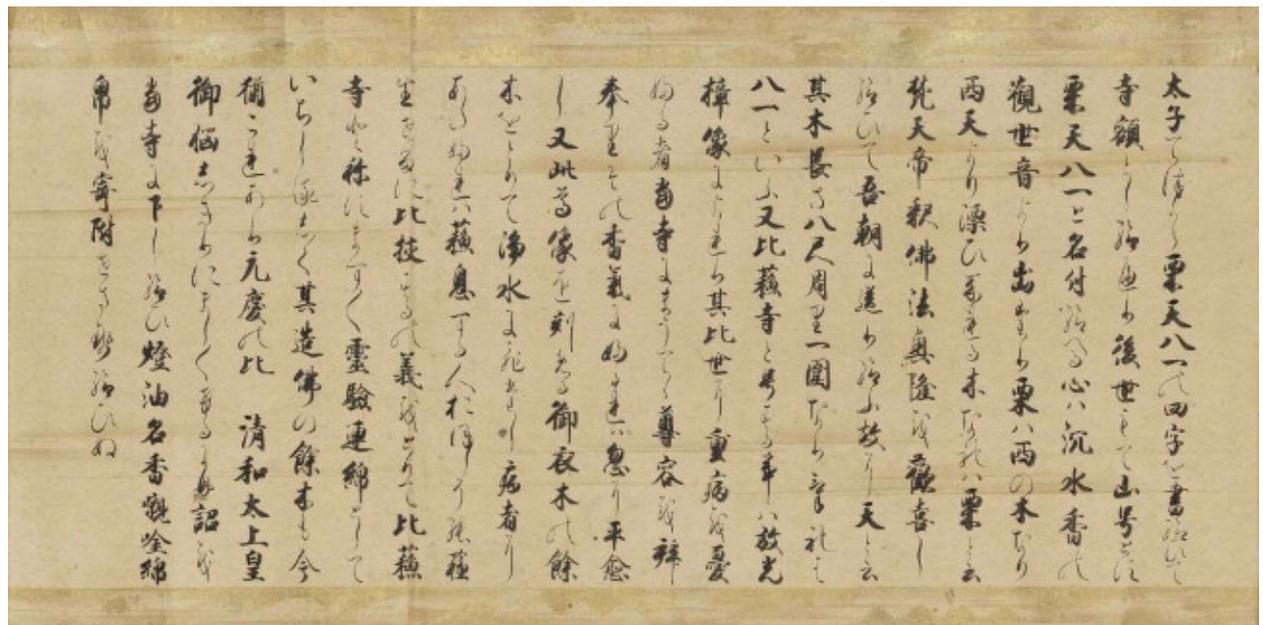
【下巻 第2段 要約】

聖徳太子はこれを霊木の「沈水香」と見抜き、天皇が仏法興隆を志されたのに応じて、瑞木が我国に現れたのだと上奏した。

そこで天皇は仏工鳥（止利仏師）に命じて、十一面観音像に刻ませた。太子も自身の姿を刻して観音像を体内に納め、樟木の両尊と並べて比蘇寺に安置された。



下巻 第2段 絵の一部

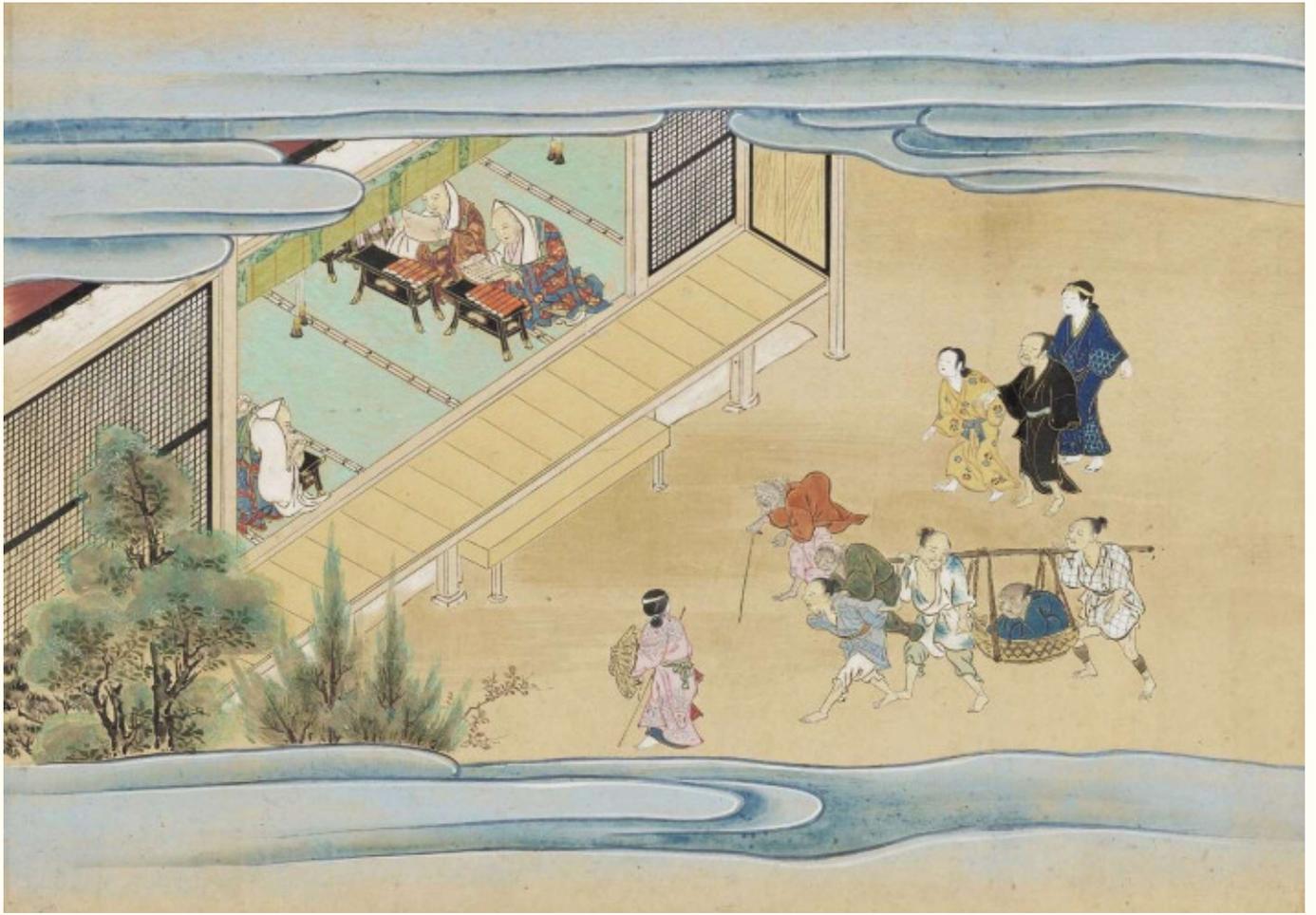


下巻 第3段 詞

《下巻 第3段 詞》

太子てつから 栗天八一の四字を書給ひて寺額とし給へり
 後世もて山号とす 栗天八一と名付給へる心は
 沈水香の観世音より出たり
 栗は西の木なり 西天より漂ひ来れる木なれば栗と云
 梵天帝釈仏法興隆を歎喜し給ひて 吾朝に送り給ふ 故に天と云
 其木長さ八尺周り一圍なりければ 八一といふ
 又比蕪(蘇)寺と号する事は放光樟像によれり

其比(こゝろ)世に重病を憂ふる者当寺にまうてて 尊容を拝奉り
 その香氣にふるれば忽に平癒し
 又此尊像を刻める御衣木(みそぎ)の余木をとりて
 浄水にひたし病者にあたふれば 蕪(蘇)息する人おほし



下巻 第3段 絵

《下巻 第3段 詞》つづき

その蕪(蘇)生せるに比校するの義をとりて
 比蕪(蘇)寺と称す ますます靈驗連綿としていちしるしく
 其造仏の余木も今猶これあり

元慶(がんぎょう)⑮の比(ころ)

清和太上皇⑯御悩しきりに ましましけるにも
 詔を当寺に下し給ひ 燈油名香嚙唵(金)綿(錦)帛を
 寄附せさせ給ひぬ

⑮ 877～884年。

⑯ 在位887～897年。上皇は931年まで。

【下巻 第3段 要約】

聖徳太子が「栗天八一」の四字を書かれて寺額としたので後世には山号となった。「栗」は西の木であるので、西天より漂い来た木を意味するといひ、以下にそれらの字の由緒を述べる。

また、比蘇寺とは、重病人も当寺本尊像の樟木の香気にふれるや、忽ちに平癒して蘇生したことに拠り、清和太上天皇も帰依されたという。



下巻 第3段 絵の一部



下巻 第3段 絵の一部

又現光寺と名付ることは 神樟及沈水香木ともに
 光を海中に現し給へは 靈仏の威光を称美し奉りて
 現光寺と号すとかや
 爰に一の不思議あり
 彼沈水香木の觀世音 中比(ころ)いつくともなくうせさせ給ひて
 もとむるに所なし はるかに年を経て 伏見院^⑰御宇に
 同所比叢の里に一人の老嫗(おうな)あり 常に三宝に帰依して
 後世のいとなみをこたらず 常に興正菩薩^⑱の上足の弟子
 西大寺の本空房に帰依して教化をうく 或時本空房に告ていはく
 我家に希有の靈像を安置す 然れとも是を秘して人にかたらず
 件の尊像は則比蘇寺の本尊也
 はからずして我家に伝へ年久しく供養す

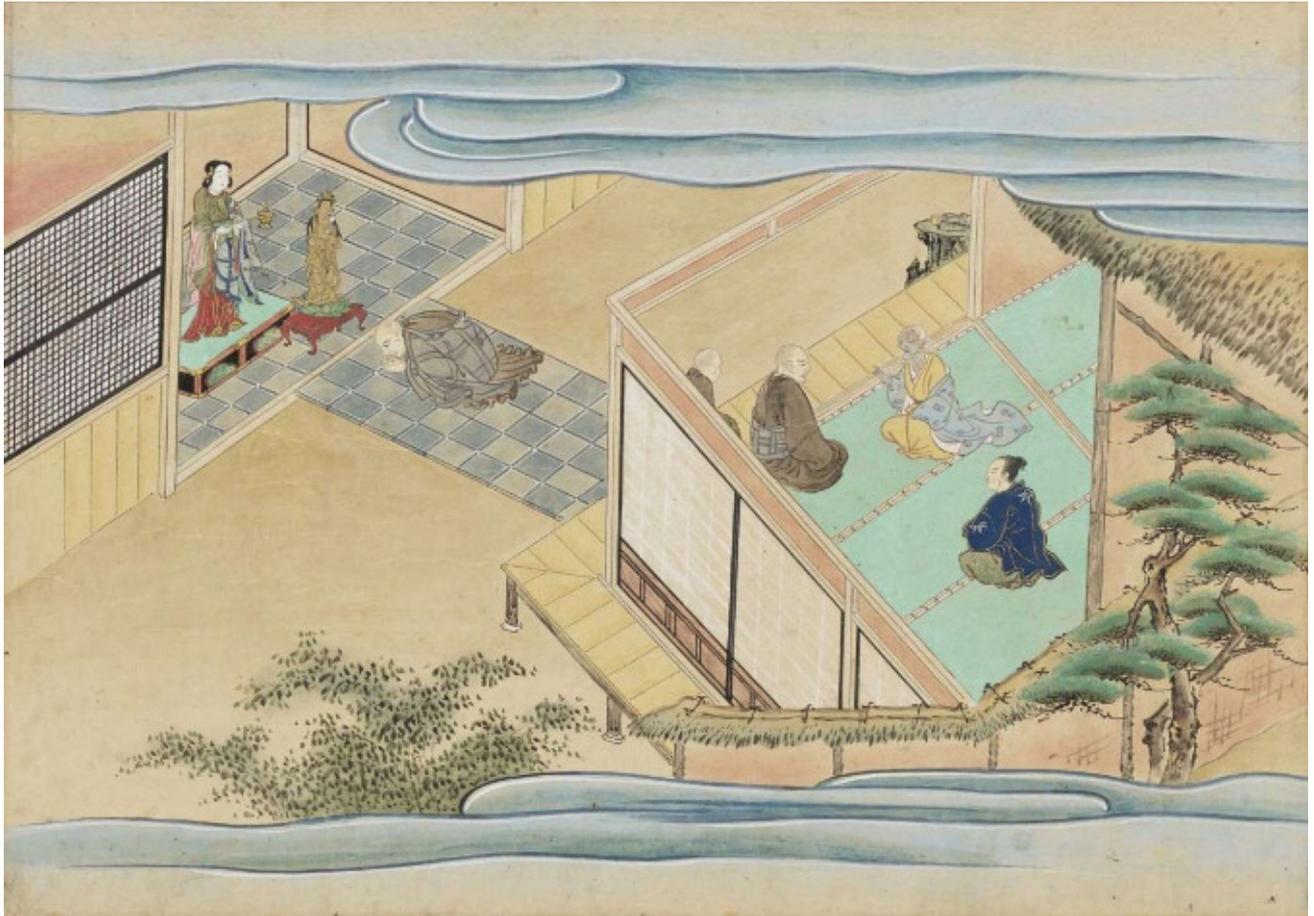
下卷 第4段 詞

《下卷 第4段 詞》

又現光寺と名付ることは 神樟及沈水香木ともに
 光を海中に現し給へは 靈仏の威光を称美し奉りて
 現光寺と号すとかや
 爰に一の不思議あり
 彼沈水香木の觀世音 中比(ころ)いつくともなくうせさせ給ひて
 もとむるに所なし はるかに年を経て 伏見院^⑰御宇に
 同所比叢の里に一人の老嫗(おうな)あり 常に三宝に帰依して
 後世のいとなみをこたらず 常に興正菩薩^⑱の上足の弟子
 西大寺の本空房に帰依して教化をうく 或時本空房に告ていはく
 我家に希有の靈像を安置す 然れとも是を秘して人にかたらず
 件の尊像は則比蘇寺の本尊也
 はからずして我家に伝へ年久しく供養す

⑰ 在位 1287～1298年。上皇は1313年まで。

⑱ 叡尊（1201～1290年）。真言律宗中興の祖。



下巻 第4段 絵

《下巻 第4段 詞》つづき

我命終の後は必ず比蘇寺に送り給へと 本空諾して彼像を拝すれば
 聖徳太子の形容也 みくし しはしはゆるき給ふやうなるを
 本空あやしく思ひてうちをうかかひみれは
 胎中に沈水香の大悲薩埵 御長一尺一寸^①の像おはします
 其薫り絶妙にして 心詞の及へきにあらず
 本空はなはた敬信して 老嫗の遺言のことく乗輿し奉れば
 本尊再ひ当寺に入らせ給ひ 其後又正和元年^②に
 法隆寺の良真の門人某僧 此観音の像を拝すとかや
 しかりしより後は秘して拝する人なし

① 約 3 3 センチ。 ② 1 3 1 2 年。



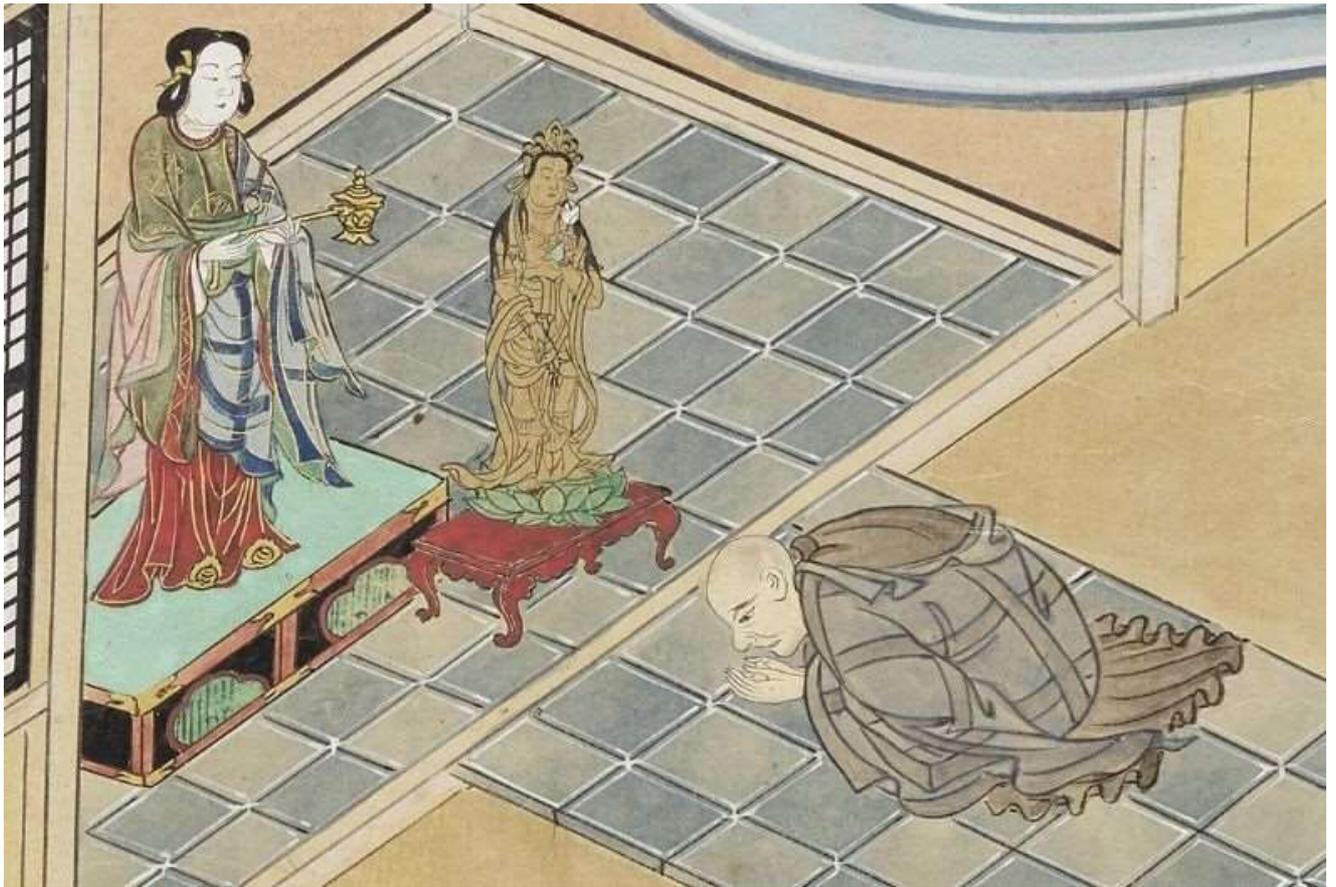
下巻 第4段 絵の一部

【下巻 第4段 要約】

現光寺とは、樟木・沈水香がともに海中に光を発して、靈仏の威光を称美することによる。ある時、沈水香の観音像がいずこともなく姿を失したことがあった。その後かなりの年月を経て、伏見院の御宇、比曾の里に一人の老婆があり、仏法に帰依して、興正菩薩（叡尊）の弟子であった西大寺の本空房に教化をうけていた。

老婆が本空房に語るには、自宅に靈像を安置することを秘してきたのだが、この尊像こそは比蘇寺の本尊であるので、自分の命終の後には、必ず比蘇寺に戻して欲しいとのことであった。

果たして本空房がその像を見ると聖徳太子の形姿であり、体中を探ると沈水香の長さ一尺一寸の観音像が納められていた。本空房は直ちに敬信して、この像を比蘇寺に移安した。この像は秘仏として永らく拝する人はなかった。



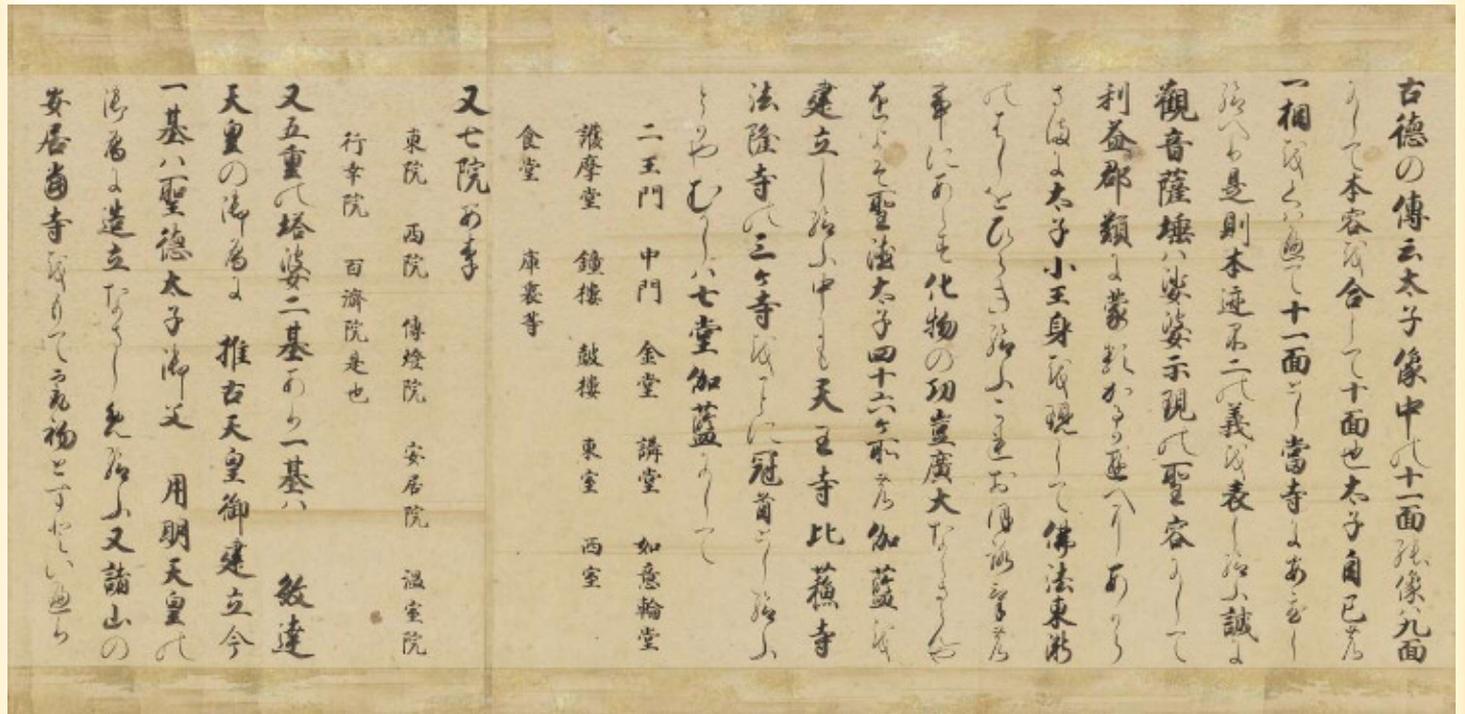
下巻 第4段 絵の一部

《下巻 第5段 詞》

【下巻 第5段 要約】

古老の伝えによれば、太子像内の十一面観音像は、九面にして本面を加えて十面、さらに太子自身の一相を加えて十一面として当寺に安置されたものという。聖徳太子は観音菩薩三十三応化身のうちの小化身としてこの世に現じ、仏法東漸をなされたのだ。

古徳の伝云 太子像中の十一面の像は
九面にして本容を合して十面也
太子自己の一相をくはへて十一面とし
当寺に安置し給へり
是則本迹不二の義を表し給ふ
誠に観音薩埵は娑婆示現の聖容にして
利益郡(群)類に蒙る
かるかゆへに あからさまに
太子小王身を現して
仏法東漸のはしをひらき給ふ
これおほろけの事にあらず
化物の功豈広大ならさらんや



下巻 第5段 詞

《下巻 第5段 詞》つづき

をよそ聖徳太子 四十六ヶ所の伽藍を建立し給ふ中にも
 天王寺比蘇(蘇)寺法隆寺の三ヶ寺を ことに冠首とし給ふとかや
 むかしは七堂伽藍にして

二(仁)王門 中門 金堂 講堂 如意輪堂
 護摩堂 鐘樓 鼓(鼓)樓 東室 西室
 食堂 庫裏等

又七院あり

東院 西院 伝燈院 安居(あんご)院 温室院
 行幸院 百濟院是也

又五重の塔婆二基あり 一基は

敏達天皇の御為に 推古天皇御建立

今一基は聖徳太子御父 用明天皇の御為に 造立なさしめ給ふ

又諸山の安居当寺をもて最初とすといへり



下巻 第5段 絵

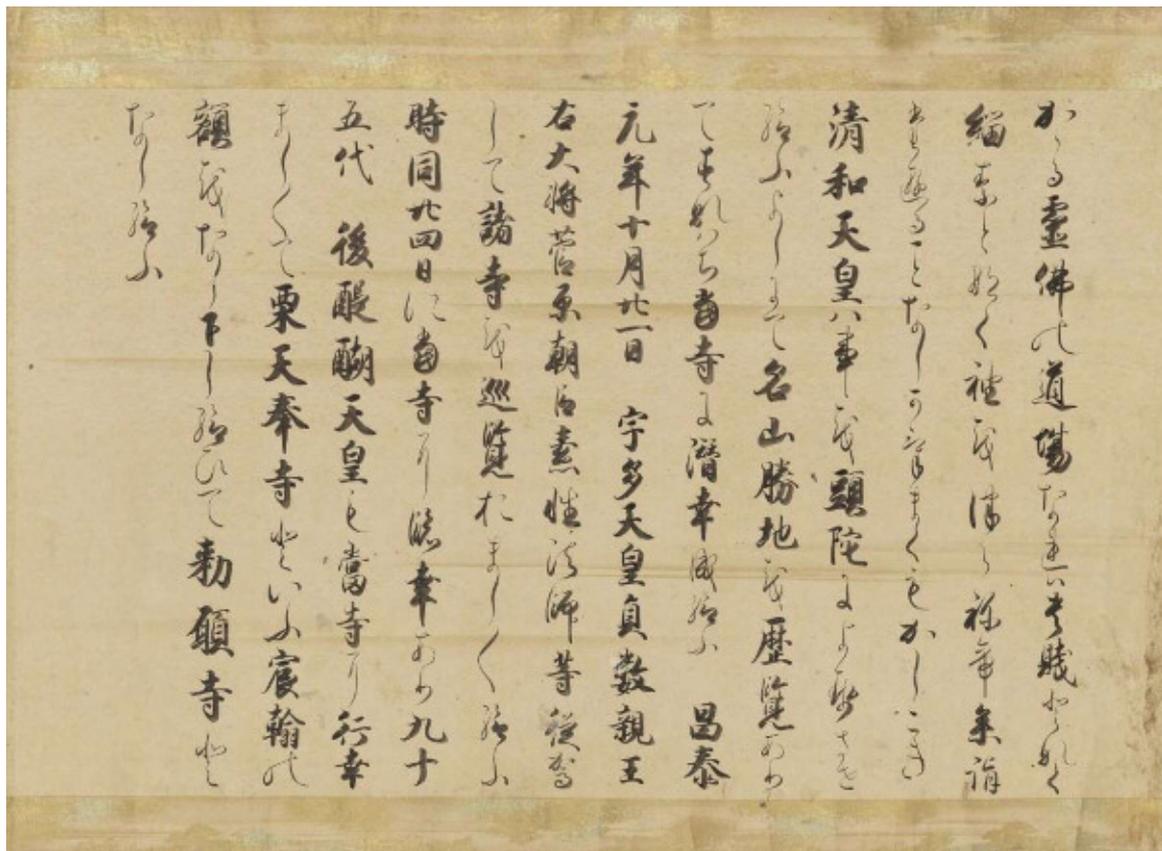


下巻 第5段 絵の一部

【下巻 第5段 要約】つづき

また、太子は四天王寺・比蘇寺・法隆寺を冠首として四十六の伽藍を
 建立された。当寺には金堂・講堂以下七堂伽藍が備わり、さらに東・西
 院以下の七院があった。

五重塔は二基あり、一基は敏達天皇のために推古天皇が建立され、一
 基は聖徳太子が父の用明天皇のために建立されたものである。



下巻 第6段 詞

《下巻 第6段 詞》

かかる靈仏の道場なれば 貴賤となく緇素(くろす)②となく
 袖をつらねて参詣たゆることなし かけまくもかしこき
 清和天皇は 事を頭陀によせさせ給ふよしにて
 名山勝地を歴覽ありて すなはち当寺に潜幸成給ふ
 昌泰元年②十月廿一日 宇多天皇貞数親王
 右大将菅原朝臣素性(そせい)法師等從駕して
 諸寺を巡覽おましまし給ふ時 同廿四日に当寺に臨幸あり
 九十五代 後醍醐天皇③も 当寺に行幸ましまして
 栗天奉寺といふ宸翰(しんかん)の額を なし下し給ひて
 勅願寺となし給ふ

①僧俗。 ②898年。 ③在位1318～1339年。

【下巻 第6段 要約】

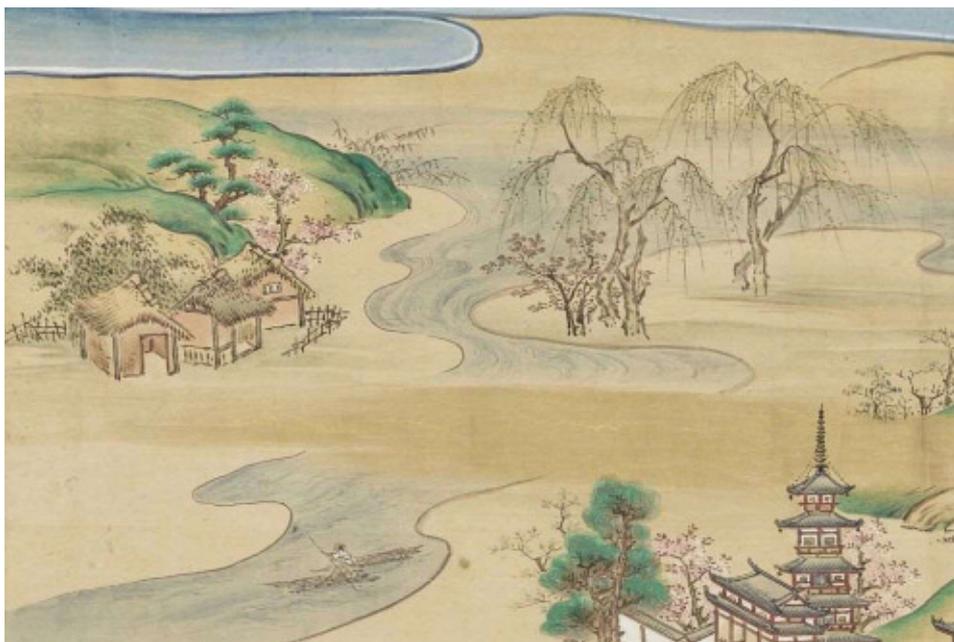
このように当寺は由緒ある霊場であるので参詣者の絶えることはなく、清和天皇が行幸され、昌泰元年には宇多天皇が親王や菅原道真らの家臣らとともに立ち寄られた。後醍醐天皇も行幸されて「栗天奉寺」と揮毫され、勅願寺となったのである。



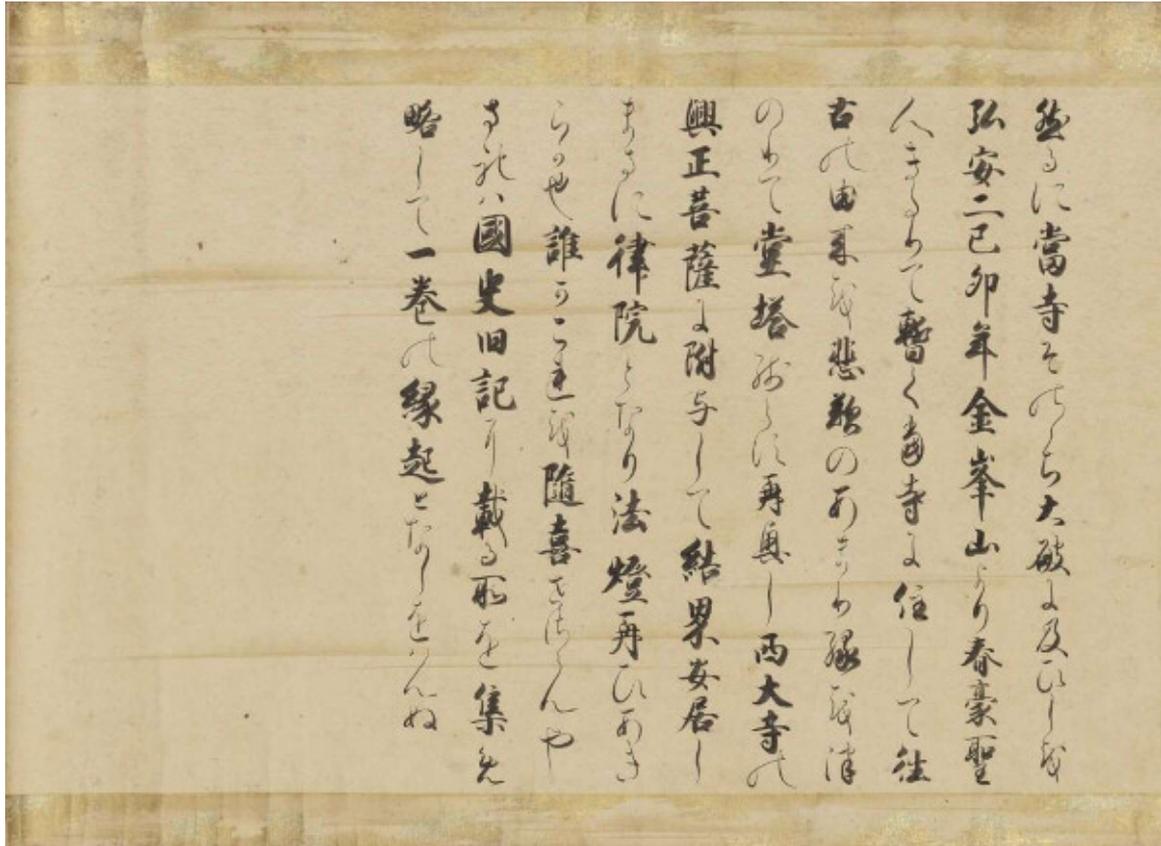
下巻 第6段 絵

【下巻 第7段 要約】

その後、当寺は大破に及び、弘安二年に至って金峯山から春豪聖人が入寺されて堂塔を再建し、西大寺の叡尊に付与して律院となり、法灯がよみがえることになったのである。これを喜ばぬものがあるだろうか。ここに国史・旧記の記事を集め、略して一卷の縁起としたものである。



下巻 第6段 絵の一部



下巻 第7段 詞

《下段 第7段 詞》

然るに当寺そののち大破に及ひしを
弘安二己卯年^{②④}金峯山より 春豪聖人きたりて
暫(しばらく)く当寺に住して往古の由来を 悲歎のあまり
縁をつのりて 堂塔残らす再興し
西大寺の興正菩薩に附与して結界安居し
まさに律院となり法燈再ひあきらか也
誰かこれを随喜せさらんや
されは国史旧記に載る所を集め
略して一卷の縁起となしをはんぬ

②④ 1279年。

日本列島の初期仏教関係記事

紀年	西暦	治世	記事の概略	出典
7年戊午12月		欽明天皇	大倭国佛法度来。	元興寺伽藍縁起并流記資財帳
13年冬10月	552	欽明天皇	百濟・聖明王、釈迦仏の金銅像1軀・幡蓋若干・経論若干巻を献る。大臣、小墾田の家に安置せまつる。向原の家を浄捨して寺とす。有司、仏像を以ちて難波の堀江に流し棄て、復火を伽藍につく。	日本書紀
14年夏5月	553	欽明天皇	河内国の言さく、泉郡の茅渟海の中に梵音有り。溝辺直、海に入りて、果して樟木の海に浮びて玲瓏く見つ。画工に命せて、仏像二軀を造らしめたまふ。今し吉野寺に光を放つ樟の像なり。	日本書紀
		敏達天皇	敏達天皇のみ代に、和泉の国の海中に樂器の音聲有り。大部屋栖古の連の公、皇后の詔を奉りて往きて看るに、霹靂に当りし楠有り。高脚の濱に泊つ。大臣も亦喜び、池辺直水田を請けて佛を彫り、菩薩三軀の像に造り、豊浦の堂に居きて、諸人仰敬す。詔を奉り、水田の直をして稲の中に蔵さしむ。弓削の大連の公、火を放ちて道場を焼き、佛の像を將て難波の堀江に流す。言はく、今国家に災を起すは、隣国の客神の像を己が国内に置くに依る。斯の客神の像を出すべし。速忽に豊國に棄て流せ。固く辞して出さず。	日本靈異記上巻第5
庚寅	570	敏達天皇	余臣等共計、焼切堂舎、仏像經教流於難波江也。	元興寺伽藍縁起并流記資財帳
6年冬11月	577	敏達天皇	百濟国王、遣使大別王等に付けて、経論若干巻、併せて律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工、六人を献る。遂に難波の大別王の寺に安置らしむ。	日本書紀
12年秋9月	583	敏達天皇	百濟より来る鹿深臣、弥勒の石像一軀有てり。佐伯連、仏像一軀有てり。蘇我馬子宿禰、其の仏像二軀を請け、乃ち鞍部村主司馬達等・池辺直水田を遣して、修行者を訪ひ見めしむ。馬子独り仏法に拠りて三尼を崇敬す。仏殿を宅の東方に経営り、弥勒の石像を安置しまつる。此の時に達等、仏舎利を齋食の上に得たり。舎利を以ちて馬子宿禰に献る。馬子宿禰、赤石川の宅に仏殿を修造る。仏法の初め、茲より作りし。	日本書紀
14年春2月	585	敏達天皇	蘇我大臣馬子宿禰、塔を大野丘の北に起てて、大会の設齋す。即ち達等が獲たる舎利を以て、塔の柱頭に蔵む。	日本書紀
14年春2月	585	敏達天皇	蘇我大臣患疾す。詔して曰はく、父の神を祭祠れ。大臣詔を奉りて、石像を礼拝し、寿命を延べたまへと乞ふ。	日本書紀
14年春3月	585	敏達天皇	詔して曰はく、仏法を断めよ。物部弓削守屋大連、自ら寺に詣りて、其の塔を斫り倒して火を縱けて燬き、併せて仏像と仏殿とを焼く。既にして焼ける余の仏像を取りて、難波の堀江に棄てしむ。有司、便ち尼等の三衣を奪ひ禁錮して、海石榴市の亭に楚撻ちき。天皇と大連と、卒に瘡患みたまふ。	日本書紀
14年夏6月	585	敏達天皇	馬子宿禰に詔して曰はく、汝独り仏法を行ふべし。余人を断めよ。馬子宿禰、三尼を頂礼す。新に精舎を営り、迎へ入れて供養す。	日本書紀
2年夏4月	587	用明天皇	鞍部多須奈、進みて奏して曰さく、臣、天皇の奉為に出家して修道せむ。又丈六の仏像と寺とを造り奉む。今の南淵の坂田寺の木の丈六の仏像、挾侍の菩薩、是なり。	日本書紀
		用明天皇	用明天皇のみ世に当りて弓削の大連を挫きつ。則ち佛の像を出して後の世に伝ふ。今の世、吉野の比蘇寺に安置して光を放つ阿弥陀の像、是れなり。	日本靈異記 上巻第5
即位前紀	588	崇峻天皇	乱を平めて後に、摂津國に四天王寺を造る。大連の奴の半と宅を分けて、大寺の奴・田莊とす。蘇我大臣も本願の依に、飛鳥の地に法興寺を起つ。	日本書紀
元年是歳	588	崇峻天皇	百濟國、使併せて僧惠総・令斤・惠定等を遣して、仏舎利を献る。百濟國、恩率首信・徳率蓋文・那率福富味身等を遣して、進調り、併せて仏舎利、僧聆照律師・令威・惠衆・惠宿・道嚴・令開等、寺工太良未太・文賈古子、鑪盤博士將徳白味淳、瓦博士麻奈父奴・陽貴文・陵貴文・昔麻帶弥、画工白加を献る。蘇我馬子宿禰、百濟の僧等を請いて、受戒の法を問ふ。善信尼等を以ちて、百濟國使恩率首信等に付けて學問に発遣す。飛鳥衣縫造が祖樹葉の家を壊ちて、始めて法興寺を作り、此の地を飛鳥の真神原と名く。	日本書紀
3年春3月	590	崇峻天皇	學問善信尼等、百濟より還りて、桜井寺に住す。	日本書紀
元年春正月	593	推古天皇	仏舎利を以ちて、法興寺の刹柱の礎の中に置く。丁巳(翌日)に、刹柱を建つ。	日本書紀
元年是歳	593	推古天皇	始めて四天王寺を難波の荒陵に造る。	日本書紀
2年春2月	594	推古天皇	皇太子と大臣とに詔して、三宝を興隆せしむ。是の時に、諸臣連等、各君親の恩の為に、競ひて仏舎を造る。即ち是を寺と謂ふ。	日本書紀
3年夏4月	595	推古天皇	沈水、淡路島に漂着れり。其の大きき一團なり。島人、沈水といふことを知らずして、薪に交てて籠に焼く。其の烟氣、遠く薫る。則ち異なりとして献る。	日本書紀
3年夏5月	595	推古天皇	高麗の僧慧慈帰化す。則ち皇太子、師としたまふ。	日本書紀
3年是歳	595	推古天皇	百濟の僧慧聡来り。此の兩僧、仏教を弘演し、並びに三宝の棟梁となる。	日本書紀
4年冬11月	596	推古天皇	法興寺、造り竟りぬ。則ち大臣の男善徳臣を寺司に拜す。是の日に、慧慈・慧聡二僧、始めて法興寺に住す。	日本書紀

読み下し文は、『新編日本古典文学全集3 日本書紀②』小学館 1996年 および『日本古典文学大系70 日本靈異記』岩波書店1967年より引用。一部現代仮名遣いに修正。



世尊寺山門の扁額「日国最初法窟」

大淀町地域遺産シンポジウム 2019 資料集

「放光仏誕生」

発行年月日 令和元年9月29日
編集・発行 大淀町教育委員会（大淀町文化会館内）
〒638-0812 奈良県吉野郡大淀町桧垣本 2090 番地
TEL：0747-54-2110 FAX：0747-54-2112
印 刷 岡本印刷所
〒639-3126 奈良県吉野郡大淀町新野 342 番地 2
TEL：0746-32-2166 FAX：0746-32-2188

聖德太子蘇我馬子と信心と合はるる
ひて守屋は誅滅し大よ佛法を興隆
まゝこの二尊は舟の楫の中より求
むるに奉る樟像ハ水土より朽給ひて
歴然とあり則天王寺比蘇寺法隆寺
を造立し彼放光の二尊を比蘇寺に
安置し給ふ比蘇寺ハ即日本紀に所謂
吉野寺なりて今の現光寺是也橘寺ハ